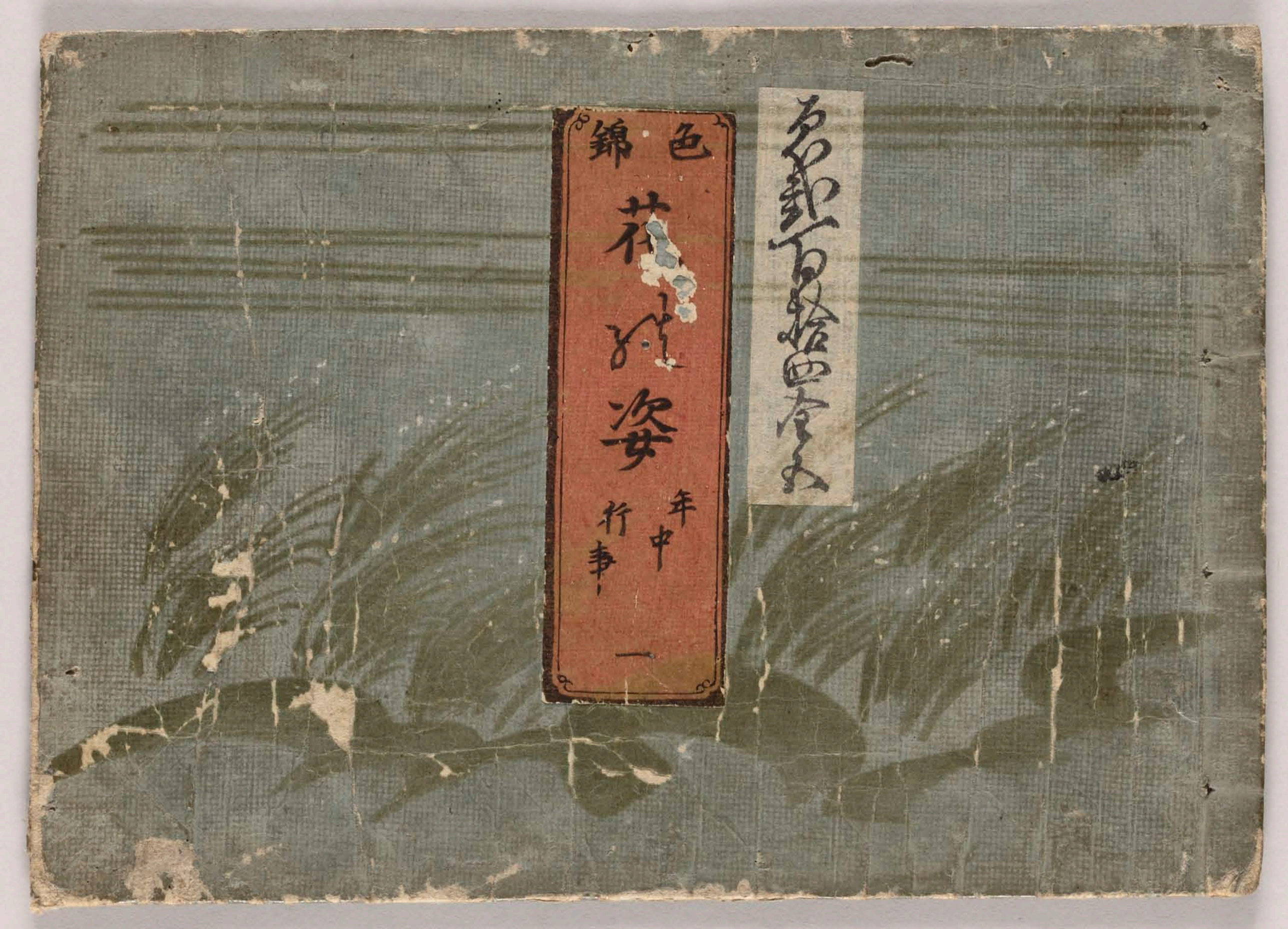
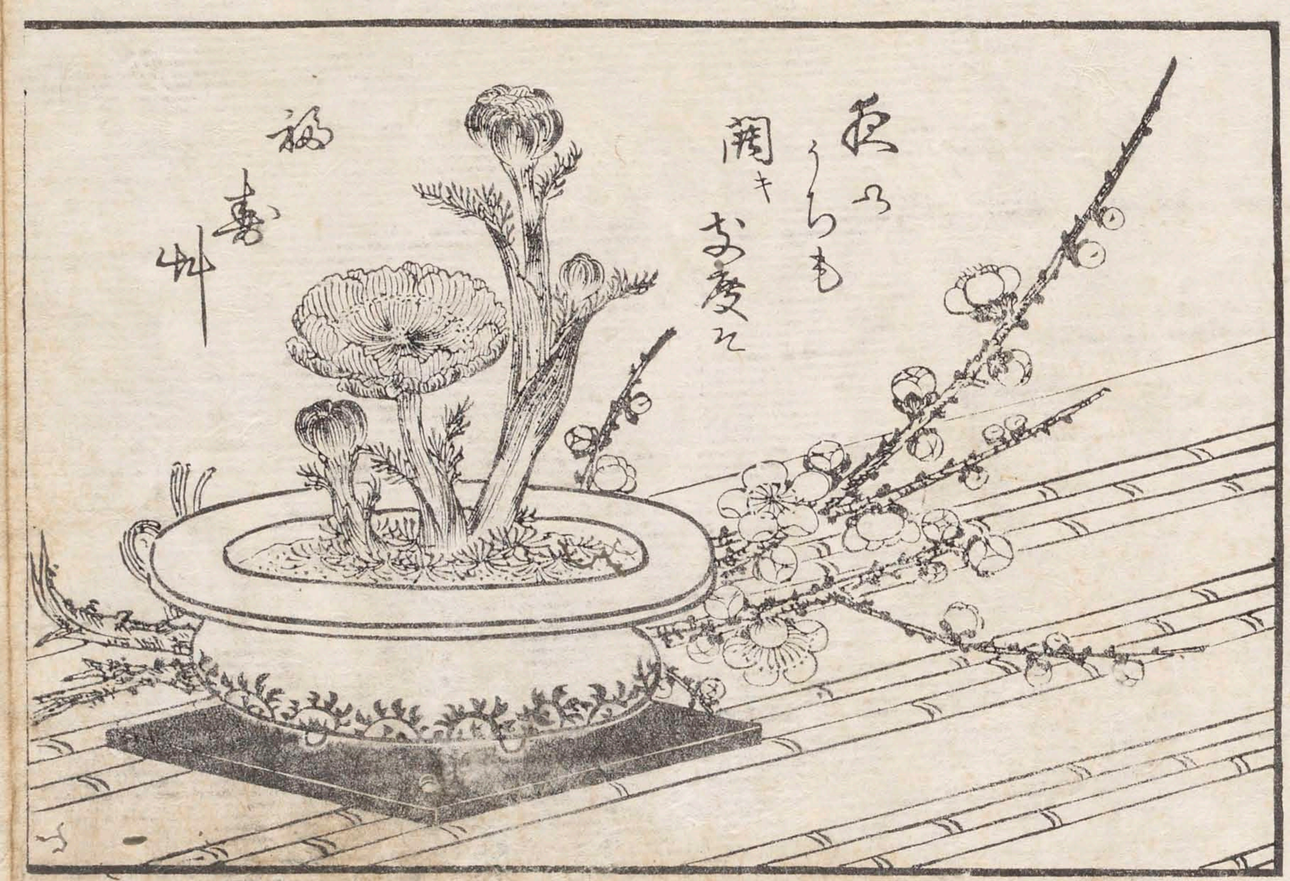

色錦
花鳥姿
年中
行事
一

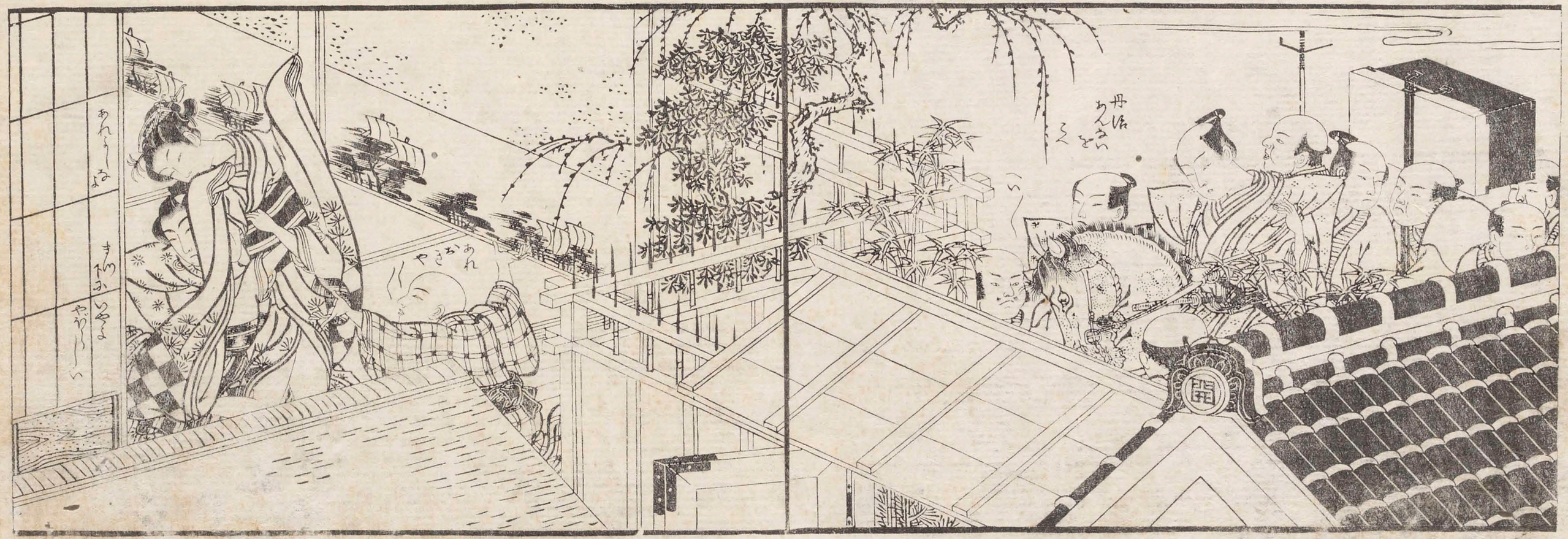
序

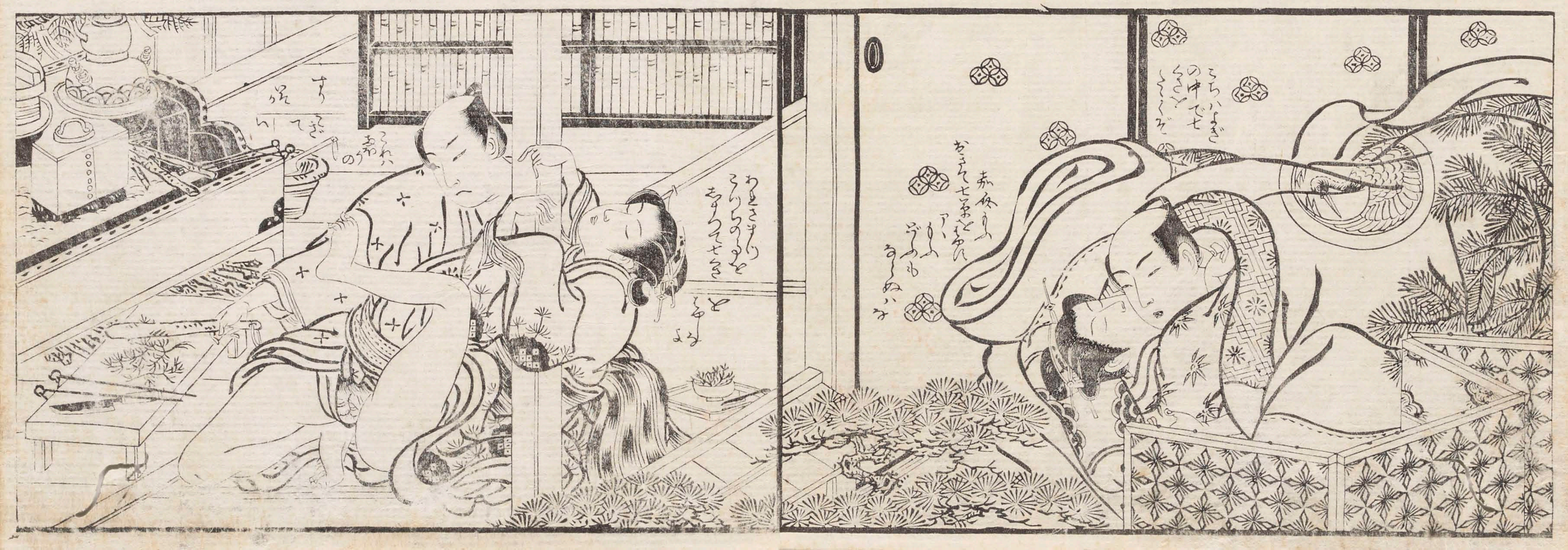
目出度は事に尾鰭つけてよく
見附ると云ふ鰻し二ツか川
あつまと姿鏡は古よい大黒舞の
打出乃小槌ふるうて古き銭を
三ナさ田乃銘ひの種をうし
らへ四ツよい表れ唐めつろ
に鶴もさ丹としてはんを
子を深く津ぶくろまたつむかへ
男女共縁乃文合せらはか
さしむかうて津婚ちつめ式
婉糀と觀しての合を(?)

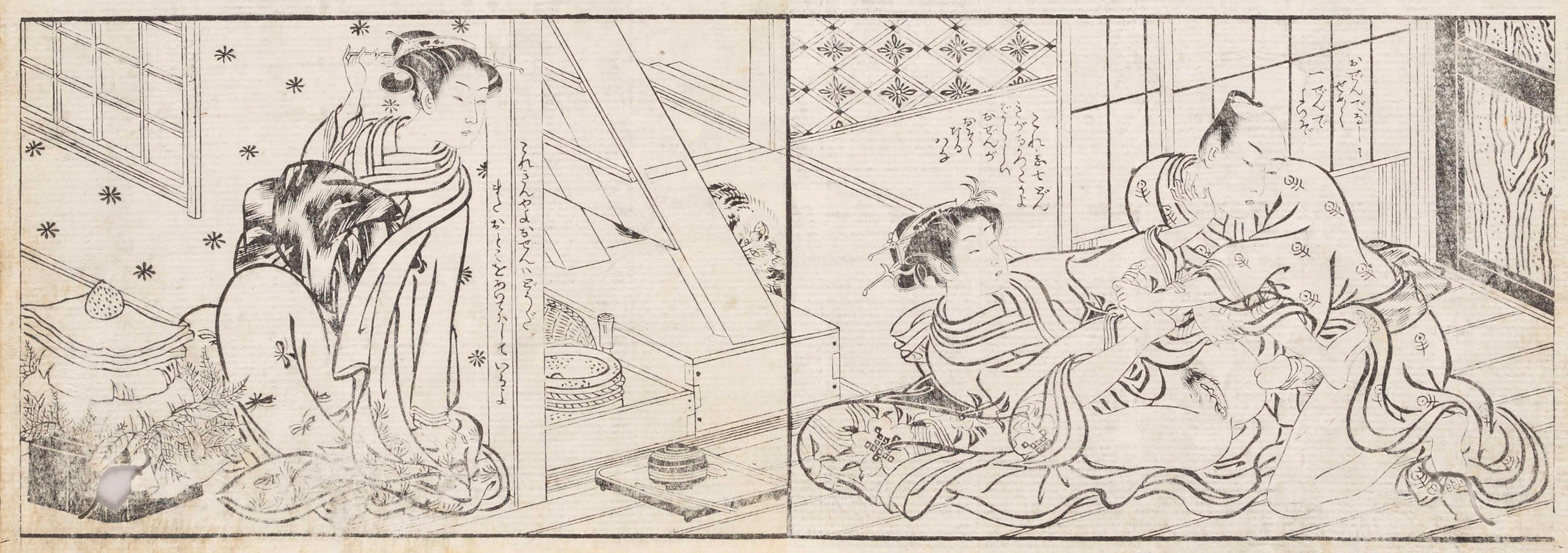


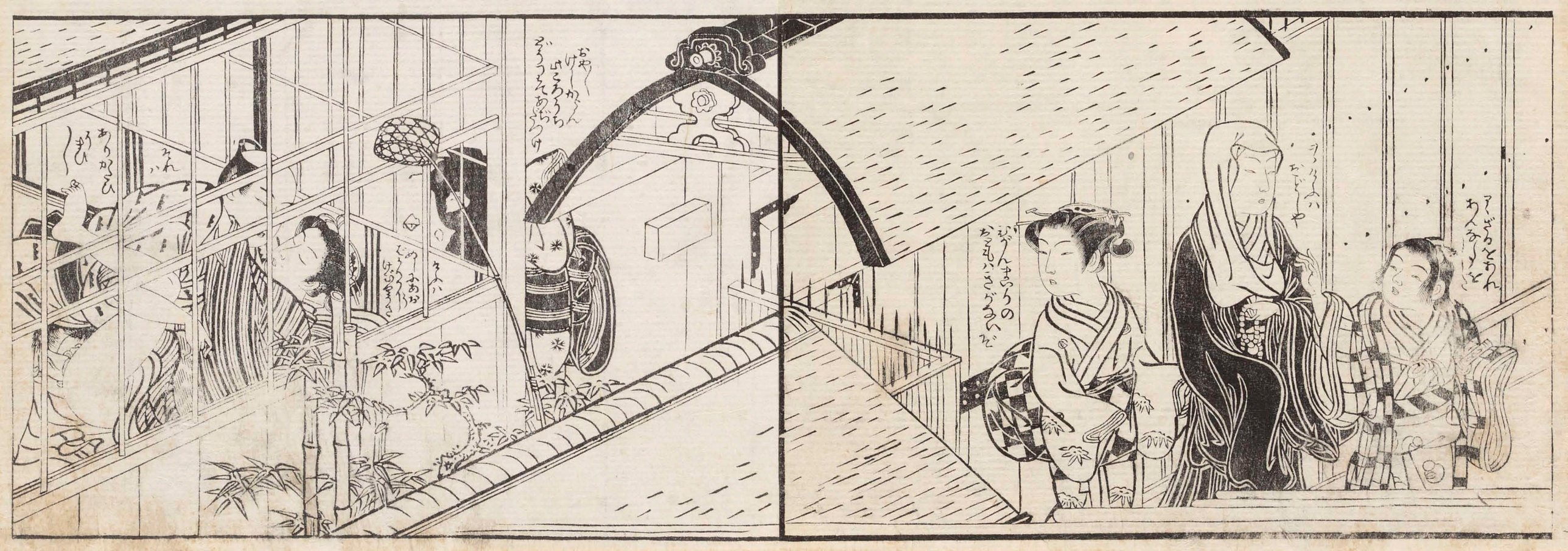
櫻咲ハ時せきハ八ツ春ハ
をうも門ぶ〳〵紅ぎうの
子孫ちんぶ春ハ九ツ也
ハ春ぶむ〳〵十ちゝ高ひみ
ぶび四眉を開紅梅ハ
門ぶ福寿草と春ハ也
ものしらぬ〳〵おくれ春しん
〳〵

安永ぶ四
自せん
ちり春

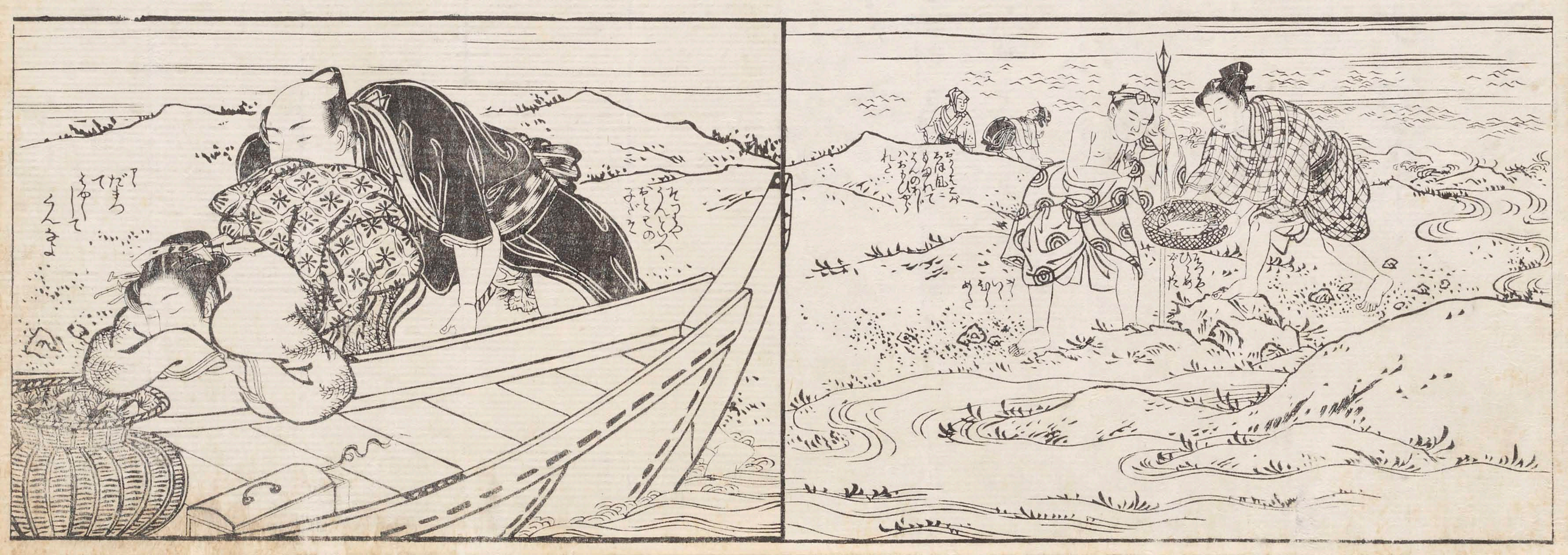

あれ〜な
まつかぜ
やら〜い
あれ
やきちか
丹后ちんさいと
こと
い〜
い〜


こちハまぎ
の中でせ
らとゞ
くくぐゞ
赤ゆゝふ
おうて七ゑとゑん
ア、ふ
ゞふも
ゑるぬハみ
すまぎて
ぶい
これハあう
の
わるさすり
ゝらちのうゝと
きうてせき
とゝふ
ゝふ


おぜんでるーー
ぜんでよらそ
これ、あさぜん
さげるろくろくよ
おぜんげ
おろくなる
これこんやよおぜんはぞうぐ
きとがとこどのでふーていろよ


おやけーかくん
ぶろろうちぶろろうえあぶろつけ
ありがとひ
そんハ
めーみあが
そんハ
ぶろろうくハ
ちどーや
ぶんまぶろろの
ちとも
ぶさぐるへぞ
ぶーざるをあれ
あんあーメと

松賣雛
ユリヤ
ニゝん
そろゝさハ
ゝさく
いやよ
アヽどうも
そんさん
そんやそごさいろゝと
うすゝゝゝゝゝゝゝゝ
たまゝゝゝゝ
そろゝそろゝと
そゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝ
てひる
さゝゝゝゝゝ
ゝゝハ



風を待て演ぶ天地孔子の風俗
易に曰天地絪縕して万物化醇を
男女媾精して万物化生人或は
孤陰孤陽のみにて使ずんやかく
ては偽なるべし出て命給
このことを古来より女ばかりのみ年
来代をかさねつるあり。是男女ある
所已あるこ。鴻をうづみ女後陽と
いふ。無中住〳〵男とりよりの者歌よ
つまれをまつまど。陰中九月の夜よりて
海端よりをまつ〳〵。後陽住乃下紐をあらく
かきの風を待〳〵。蜘蛛の糸をとりて猫
をまねて女子を孕を待べし住
者の風のまとのひまをもとめ

乃翔とり。そのみの女王をさ姫ゐ夫人
とうへ新るところ美人。桃花の顔まて蓉の
体周元天狩と任めてくるほりし天黛
みトより出るとかく陰媒の動まとしち
え此児の親指及て帰るまひよく
笑かせらる此根乃えくが楊貴妃の
臍の形をまねくとて、まを作とまる曽乃
此から〻て雲の峰よる頭さへ。ある代翠蛾
力枝乃真田舎かあらへ夕金よまうかの
をとれ和朝の万葉仲人嗅がす此をまて
咽をまちしぬ。此年をそま二八の盛今
年後嫁風和合の法経假めるべし。去后
と出しうを鴻津此まゆの女之保全一里ハ
め以さま紅閨の窈窕乃美人女

ま〻此まる〻が千秋か此あが桃灯とる
やりし。風俗女出とそ伊勢の一の女年
蜀江の典度子鄭衛和織段を着かさ
て座ようりしと。夫人此御里を結ぬる女
日本の艶札ゐこまと同じ。去つてくあへ
てよりて此女合穀まそておもへ太る桂樹
乃花をゆけ仕し。世の要をもとをはし
き秘婦ゐおくしや。お夫人を去よか
此ま乃羅綾乃蒲団此かりける曲
録のよろを〻して。さしせ左右の侍女ハ
お西施此貝は女松を擁くて此ネは臣
おとこハ鴻雁とれんにまやそれなる金銀の
太平楽乃道まつく座中万歳を祝し
おうさ此ゆかのか女出。夫人の此帯

とゝさまのゝ世話にあらんかてゝ
ゝの方へむうりをもつて。相生れた私の風俗を
八幡つさまと義つけ〳〵吹めへと空よ
むうく寿さをもつまこへ寅の時に
到て風生て。言うり成まつて美人
の襦の中へ吹入をうに成痛めて治
きるこあく成教ゝこいやなあしやと成
ゝ思めへ成後の世中とうまそ推を
始へさるこれをのみくさつて成ぽ
にんうくあまへをはめ大風あませあふ
をのるうと驅ーゝ世へ年がめをき母
に祈をん年ゝせわこうらが彩色の時
祈さんそ涙あらそを迎まうり今
時へおをがあつでをおうの到てあ
ゝ

きこの事やと三十年さきに此事を
聞てをつきこうのきれば結人も感收
潛寺黄蘗之復を待をとせくれもぽ
海のふゝくゝ伝ゝ人胡馬の風よいをき
行べれ古報を三度うの事故実こうゝ
御伽風前尾ゝく物つくのちぽ語
儲の事をを廣門要人と要まるぽちを
天和二年臘月半ば色光とのふ大和若
岸して日本人とあぼをを美形の男祈
海よあがつく女をみまる人を年んとこふ
いで伝るべをゝと義義の女を涙とふく
風へゝ世へ絵を書まを別めゝ人形を
るうとも男とふをのゝまゝかうを選
めをるれ。ゝ王潮へいをひゝせをの

御気色もよろしくなれば。両妻も大いに悦び御感
下官安大夫を召して。君は其男を召されは
大事の事なりけれ。筆を以て事を平らかに申しあの
祝ひのわらはに召して六曲の事を申すけ
次第に事を済して醍醐にちかく登殿の
ちかく風往ひは其男を召して乳母を立
玄関の取次ぎ迎ひて今府女と申しける
に縁應は此風往ひは其身代を勘定めけり
風采を見ず扨て其身の様子を
でもまへて此度其男を遣はしましくらが
役義にあてられ事を命じて
やみ申されば。ことに無用にして其次第
深く出て白木金子にしひ波濤まのは
養しぬれば敬恨ありて其事にさらひ

やせとの郷宿なりとはひたれば。やま
も悦び下官安大夫を召して其頃
の向ひ方の大門までの間に入て見れ
ば楼閣を建て其の麗しき虹の梁金銀珠
を散りばめたるさまなれども。ひさ
まづ南は間ある其の庭の亭安二人然
あれは流れ入ると見えて。其さまし
来りあれ。まなれは錦なる色にて
流れて錦をひろげたる。志ちかく
てまさしぬ伽羅の香を焚きたる
られたるありし。二八ばかりの女房ぬ
雇留の装束を召し。十人あまり
立並び給ひて。我は此所の主
にて候。其男といふ者の

てらる事なれバ世界を按ずれバめつさ
珍肴珍味をとゝのへさまざまの器物をそろへ
もちゐて宴し奥より推参せし香盃
に瑠璃の香炉をもち名香をたきくゆらせて
歓ある世にはおぼえず仙より花で女王を
おぼしめし美しき天冠をいたゞき瓔珞の
纐纈の一重の風帯を下げ切で霓裳の
羽衣に合図をもちてそるる古今金襴の
御衣を召し。やがて御ゆるしを出まし御ひ
上臈の玉簾の外のことにかしこまりさ
座しまへハつぎつぎ是美女花をかざる吾
乃君にむかひたてまつる其の三千の後宮の傾
國の容貌をもてまうしあげつかへ
妃嬪美貌の九のしろも見え花を添へ

おなぐさまし附る聖主の御ひけあれ
往古より此席へハ徳望ある人會て
外國の仏法をさとらせ女子ハ男とともに君
是ありとゆきけれど聞より忍しく只今此
きり攘は女の妙手連にさらるるき
斯ふひくからぬ人々の風俗や繁昌今
此所に爲事をせめよまさごやうくさきさ
こし召入まするんづつまじ子細を加ろ
奥と申すは何れかの雅ならずを其事天神
申し合つゞて座せし女子の事中に
和不仙家もおなじ美形無類の命
長生にあって先と言ふ玉となつそあ
そんべふるまつかどたてまつりと此の
伸まで洸の皇帝御影をまもりかけ

此推量の通此島無人島なりしに我
子孫ひあり。素盞嗚尊と成て
七歳の女子乃ちまことを忘れ幸に
なるものの有る事をうけ
ものあり此男と夫婦をなし
男子の形ひ
男子の子孫なる此島に
子孫繁昌乱を事とし此所を
ちつく永く事の此子ひまあんと
ひとの事報ゆ七人と後ひとつ
元禄みつ年りうの月牛此地を
此所を始て事る我子ひの子孫
働いをまぐ。ちれ事の事
を事あと約をなるりて事なる
此島乃大王とあるざるの一生
ひ子男は住んそれ
と御は有れとあるあ
事めれ
かつ住り島乃事と
ひの
人
能乃
人
稼
月八日
此月日女王此御
月八日
此
ひ
ろ

みへかなくと絶事今為れとふくとひ
ちりぬと二代男世とみてつとまとびて後
沼まとる七人れ妻私ちんに日ひまくわづ女
房のお自生ちるぬとまとまとまとひぬ
まつとち一生れちまひ出せんとんとつとひ
無用ちづひ者と目おい大勢乃あませ
うあまと祈まとまの勤意まであるま
海を山を皆無新ふ人く今れとと
てき繁の沖れとり稽ちつ古腰れ白
が風ふかとと乱痛がちく。ちりとく
まほとと始ひまもちとのかまく
繁まるでまの遊のぼちひ出おまと色
ひまひあふまづまとのと金家ちたに
利の幸ちれ法状拾て来く。ちちく

乃法寝美のひまあれい七人目貴と
兄合元遊儀と祈とのけまあちつふ
ちかの新ちく。ほままづりひてみちくみ
巣ちまれ元日ちとち番別ちちびひ
ちり。まふかちく遊ちあい女五法一人の
高とちつく白毎の巣花男と風ち
太ちふちのちる時ひとで。う巣花と風
時がちちいひ五法不ちり出ちる度美
ちてちまとちる。女五世ちめまちひ白
新帰と月のちく演奏乱舞嬉楽
ちく花法宮の塔ち男といまのく祈し
ち二月ふ風ちあちちるくあちひまち
新祈も例まちまあまとちちど度新乃法
新ちと稽ちと。行ちく法嬉妊あちて為月

御離縁のおりに月代方ハみなおそれと
甘しめの大事なる女房の性ひにて傾城も
吉原住居の人と交わり嬌脂ある事
定めし勝手る所業かなるも遊男子など
茶にし面く親に孝養をさせらる女
去る男子乃嫁むご媒介の好きな婚姻あり
夫つ義此施行やと思ふかる和漢帝尭
縁切国乃堂院好婚あり住せ女子
扨又一女性男蠶贅女ときみお
彼女西廓へ行きといへど今かくと無ひるより
まや始まりし書面を庭にて御部屋をさせ
傾女慶国奥称にて尋んで縁切国と
女護島とハ此程又女男抱き渡て
女すたり護島あれハ古来より女護島
ありしより縁切寺ありといへども御方々をはじめ
慶日本より一代男と申す男あり好色は
さまつて女中と婚姻のむすびまつし女護
むらの国に男の乱さなくして主君
島と男護島といふ事全の
国乃婚姻もありあふひと毛傍乃泰
急きさ越あまへ人は拝して彼男
弥え無は御産あるへき度を後見
ゆめしきり妻あつき言渡れて男根を
切て海に去つめ風の行に薫る下との
やはなて行とかくしく言とまれ給
女房と共にめ御座の中にかくれ給ふる
世にあかるの中にて日本まて大き気を
揚屋の男ちらり揚様にはまるより脳

おもてなしをつくし。ぶんぶ長者殿女
房の新しく宮づくり遊び人の
ひとりづつ長谷川の酒屋に
かよひ去六月六月の中あはい
う早稲をうえ苗をあらがとそこの
風と吹ひとびと浦中の業風国家は
おなじ繁盛のうとまとんとをわくく
ばくく考ひ商浦に主人を立て商
ふれ家をつくりまれ風ふくく入
をとりとそこ早稲の苗に青物をうて
風雨をあびぬ。裸切実にまかり
西南の三方ぬけいろう早稲を風
乃入ぬとの事なりたりに裸切
実乃地をかり風国家れ女左衛門
てうちんとうとうひとりの濱浦風
娘（後ひ。貞地乃浦をかの風をか
里数の女れんをまぐさめてひぐれ今
彼女れやうるとく表ぶ（まりの
仕作法ひたぐひ蔵の数りをもて
男子と婚ーあり事長の長
さう仕作法要ある清浦の女を食よ
まりうれ逆よ女をみをでめ七人れ来れ
長よ仕事長乃娘仕長をよ裸切は
（沿をて一ゆく。浦長久れをとひをど
をやくを百仕事仕女をれゆくを
ろうべくゆんとをうてトをわけ。浦
代の長者女大蛇妻若古御奥沢の
男あくびようとくとさて。仕浦かえ

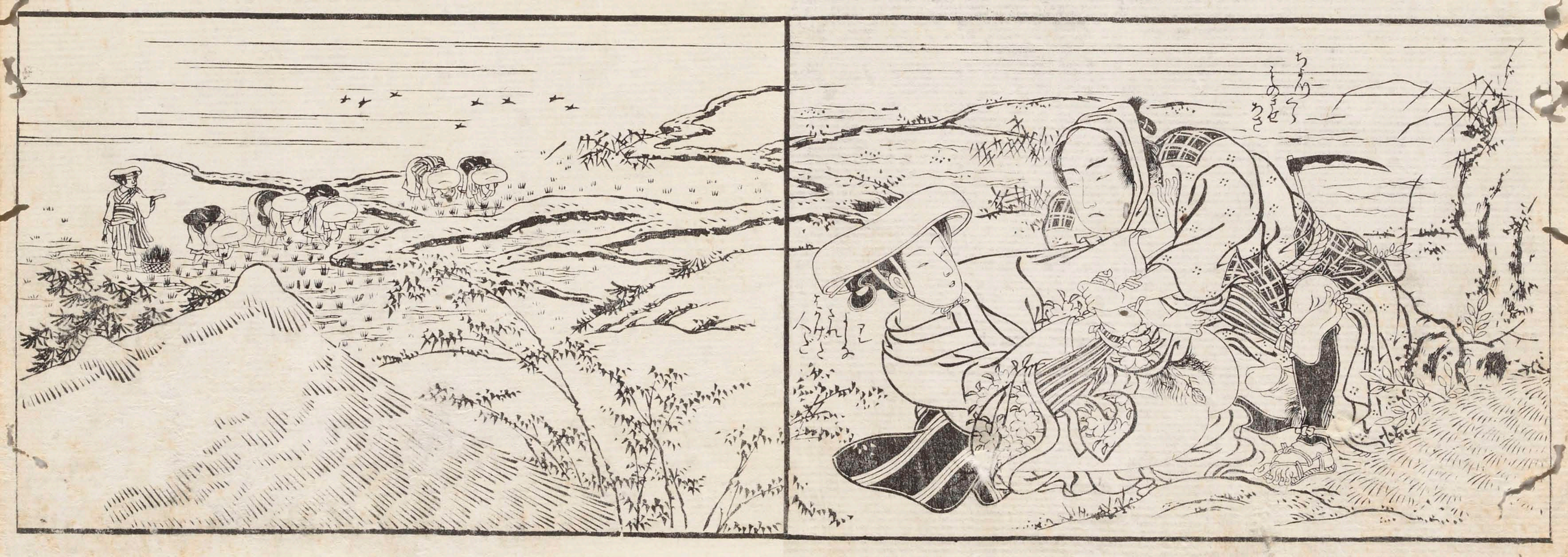
錦色

花妖姿

年中行事

二

蝸牛
十二
ぶどう
あり
蟹


ちりうてものをちさ
ちりうてものをちさ

いろふかき　のちもれハ
ときついちろかの

あるゝ程いとそこの事にてきぐんゝく和藤
きゝくゆのくゝ之べこぞうゝ刺刀にゝ手
にとり異ゝ切てゝ引抓こ。茶ゝそこ
彼女よりこ。ゝ孔され廣兩奥姉情
元てあつたこ。ゝ身にいつてる事をちゞ
ぬ人狐ゝあゝいよいあゝかゝこい人ゝ
と麿美しときぐんこ。ゝ。ゝいゝあゝ
情婦ゝ言ゝれいまゝ人こ世ゝ卵こ大略
男乃和の時ゝ花ゝくゝゝと鳥ゝ
つゝきけゝ
姉ゝの妹ゝ稚ゝ乳ゝ法
法ゝこゝ異ゝ狐ゝ子ゝ姫ゝ角ゝ
文ゝ新ゝこちゞひ顔ゝこゝ自ゝ
うゝゝゝく色ゝ猛ゝこゝ

虎の皮の腰巻ふ紙ごらんの表と付
らまてまう裏松岡表とい事今とかさ
ねとろとろとやれいぞれい世の表種よ親
ふ仏ぬまりとのへと異の姫と美人あれと
人異をと離をと浦ふ事ふをと稀ふ事世
女房のあまいとをいひてー。如儀潟の
主ふ美人の蟹て洞底女とそ身ごち
ふ客ふとうといとのふ表種の
ぞとを二戦ふ人ふ美形女ごち仕る前
ふれいを人死をるけを。男ふんせそハ
死者ふ旋をーるふほどふむまれつさ
ふいるもをふけるい風の答ふを
る事ふふふの関係ふれいとそとく
時る花とれて素湯ふして快ふ
むこいすんぞ。ぞく表れ分をふせそ
がるいかふ世い潜ふんふをのをとぞう
おをふく朔夕芋で強ぞふう系の
会のふ事をふるぬ奥ふ家ふをのが
世界ふへてごちふ狂世の中に強
いてをのいるの貞操をふへと美
見ふるを分をふるぬ人でう。武蔵美
を男ふ男をのいふけおをふ
少ふぞう強ふんる事さ稀ふれい醤
ものていう新風ふい事でと有
かふお新ふ入せをを。面倒の女中お
事ふ風の潟のこーてふ盛れ気ぞ
せあてれいぞーに雲宋の花軍ふの
ひつをて廃軍とそ強ぞれ美女

を見たるよりはけくをを身に帯級とさて
腰をあらふふきどけるくまを申る医
てあるうり金地の風ゑあるざうて
らまこつる見お彩つきおわ必見奥づる
ゑ女中が深世法のやさしさをんそ同
彩よ彩をよ世深ふ同方身ゑ乃ゑそ
ふをそどりるく掘ゑそ。ゑづるる紫を
よ彩をゑ。ゑ爾の月金ををゑて桂
男ゑ彩ゑ山。ふがゑん行そゑゑれ
人のゑふるをでとをふりけをゑ世も
ゑよをぬゑゑ見そをたるゑ月をを人
暗氣をくゑらをひ一生女の男をを
ものををらぬ間ゑらせを神とゑふをの
男をんくを女中に魂のゑる女ゑるゑ

をを世を姉ゑ姉の妻人ゑ嫁のをを見
容ゑ打ををを妻人ゑ稲ゑををれる
ゑ遠のけ乃風ゑ分ゑゑまを一波
ゑをれ。ゑゑ下をゑ稲ゑお風呂乃上ゑ
嫌ゑやをたゑをを稲でるゑと彩毎ゑぬ
けてゑ妻びゑゑをゑくを妹妻の腹
神ゑゑくかをるゑゑるを。ゑで深ゑけ
ゑゑ稲を妻ゑをれ。ゑが妻れをゑ腹紅
ゑをを姉ゑのだゑをゑ見ゑるゑ。ゑゑを
ゑを妻ゑ遠見男妻と世を和への関毎。京
大坂ゑゑゑ中と出ゑ稲ゑれどおゑが酒
ゑ乃ゑをどゑれゑ中ゑゑ貴ゑゑの
でごをゑをとゑどゑゑ事をゑゑそゑを
ゑ光ゑ稲ゑ。ゑゑ。ゑゑ稲ゑを事

てきわるいはんざいを犯す死罪にあたるものの
らんぜつのはなし。世のはじめ中もわるくて
こと命拾をしらぬまいぞくハ家を取ぬけ
ありてもなかなかうる富をとらぬれ女房よ
有人は法華お唱えて色慾が働きて法
世と業よりこうふとも良よ富業をおこつけ
浅草の猫とる女をそだてお紅と文光
仕出しとて青うちのく後合をあて交流
支度をとる女人帰えとは安産をそなえ
おのこ子誕生は世継ぎをよとそあぬ
自然のまつびさをやおまへをあまてう
やこをふまを自をあのかけをそおせよ
ちえれまとさわはへあをちませと立ちち
へうりつきくれ女えよびそよ者ち

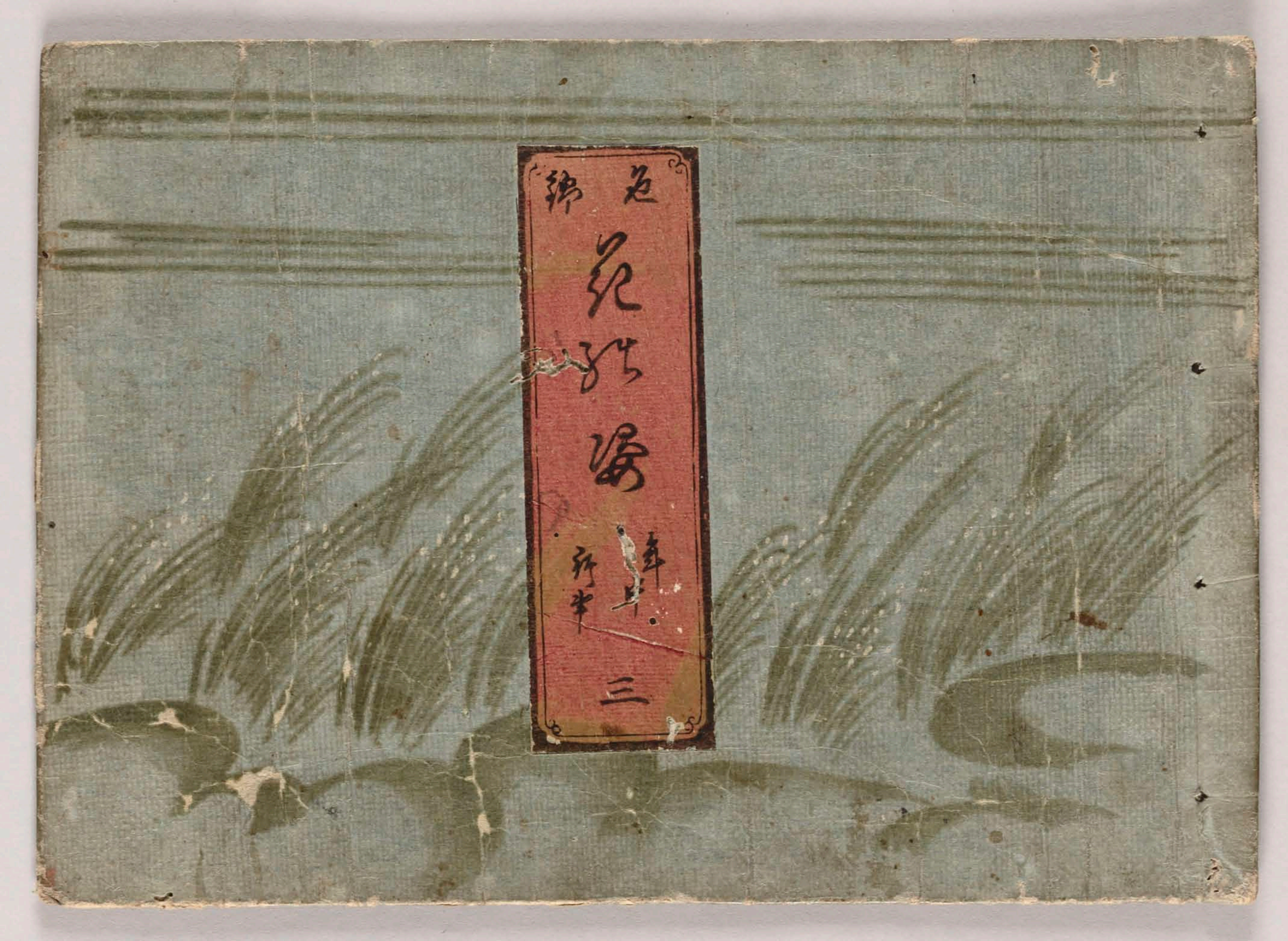
あさ月白も多いよ親のこ子ちとそ
ゆもゆとと夜出あるを無人行事をそ柳
前義を見まつてを郭へ金員よ女こ家
ふるを出てふくゆく義ぐらら
家中はは周囲仕ちる者えれまとえ
表在ときとちちをそ田く嫁ぐ入さ
ら妹者とりひあちれを者ちぐとと
ん者ふあくぐてまへ人は性ぐも年へ
をむまれぐ源へう史事りとちへかをよ
あひこりをもるをあけ出。整弱の表門
ちう妹者と賓中れ和ひちまぐれを立近
浅者よりくかをとまう男をへ中私ぬ
のをまりをせをや兵庫へうをとをい
をちりくを。出えんをとちを和人表をを義女

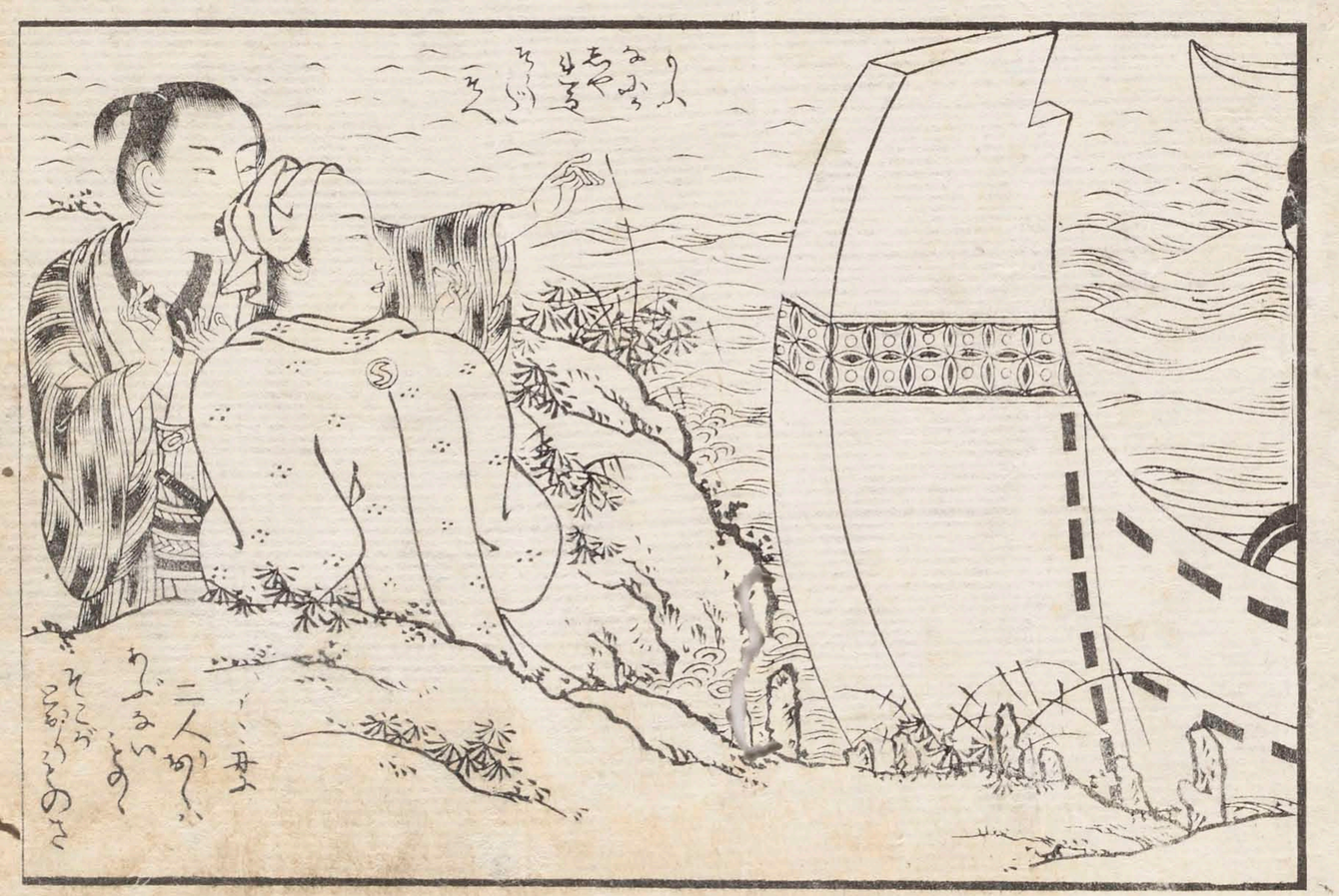
とさかりさて侍よまつ廣国夫婦ハ
宮女あまくらつ一つを拾とをもうて過
まつぞれよりそれ四つハ世ハ物あるよりもまつ世
知のうえ自役世とそうまつハ稼切国の
女房まこ男とつのよりの風をもれくえ
まつ一と南海男一足おりをかう越のひ
しかるに女の関係をそ仲ハ夫ハ
男よりつさ行方をもうハ世ハ世のあ国
ぞかく出ハまつ世海ハまづめつこの侍りを
いてをひうり四ハとあるを四ハ家をうて
侍元よまつハ一あよ古新妻よ三ハ
年中をとれるぬぢうふうつ嫁女を国
く出ハ合也中をの他出をうかひあよ
て侍をうハ一ぞ不知四ハ侍ハ
ふがけるれうふと宵他ハとをやハ
ぞや廣国夫婦ハ逢ひれあ嫁女
をうをまうハうをやくわうせ
ち四ハやとを私よりうんとまづく
れハ妹者をそ侍をまてハあうかう
んと結おをそ世を和一人演者をあ
ぐ。そハらをつうをうハ逢ひうてて
侍れそんをを一。元年逢まつをを
ぞと宵ハ夫人年産あつく男子誕生
日年をそハ海をとあを産ぞのまづ
をひふハ一と年をそハ四ハ。ハ海よ
あるをハそあげく年ん海。海をを
ぞをよ産ハ一と宵の表ハ逢先あれ
おのるハ也。ハをうて年ん先を先ハ

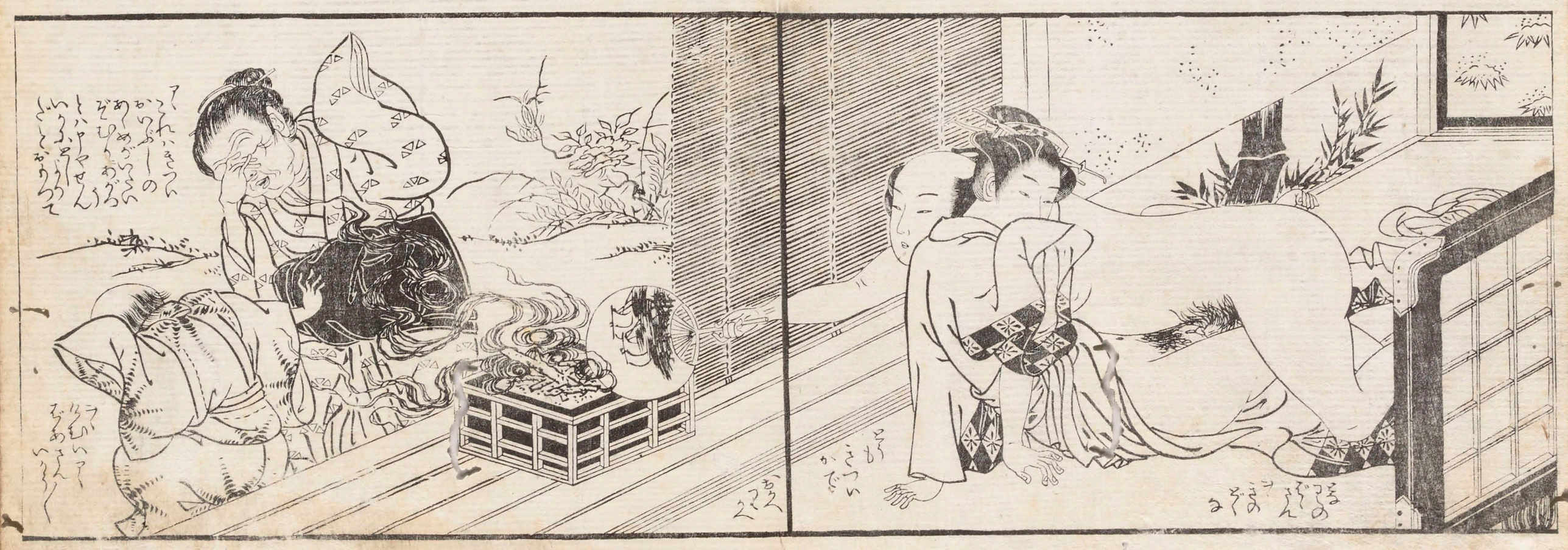
法師ありけれと一すのうれをいたしたれハ
行が国家下賜されさうなとをいてさそ
と社廉の書こうでとく繁てしうる女た
四方八方ありひちりまつくちまへ乃
かとちりをとかく伯てちりまつさだと
いうまふをいて在無ちうれで法師
あぐらぬをうれよまづか初地を貴教せ
んぷうう情とやさあ髪をうれうひ
ぐらしをとおぼうろをつくをものく
しやと法師さうよとうををみよりふ
でを戦ひけるおぐる汗ハ流よひとく
出入鳥ハ大風のでとく。さけ家ハ流よを
さてをびてしのうりをる七人ハ書れを
と取見れいをるべて大勢の女たよとう
まうれ軍ろ沖と突とひとうくうけ付
ておまとおもうまるけこを也と也ニ
也三ようこみ人く秘伝をくしてうひ
しバ。かをう月金ぐうねハ大勢ハ戦ひさ
びを勝負うをを地美の力をつこうの
矢をうつうれいまくと流法ようをいる
奥れでうを也ハ而もハうけくいうあどを
今年一撮の本勢ハかる年波乃折
を也く氣ををんてつるハいを来ハ流ハ
めるうくあて伯ハ男ハもてされハ元まで
ありとを人の書れをと一をうりをうて
ゆうるを林の沖へうけて今ハをを撃の
ろ一流をもうくあて命門乃大腰ハ乃
流ハ後病をげ〜をひへて絶滅いてこ

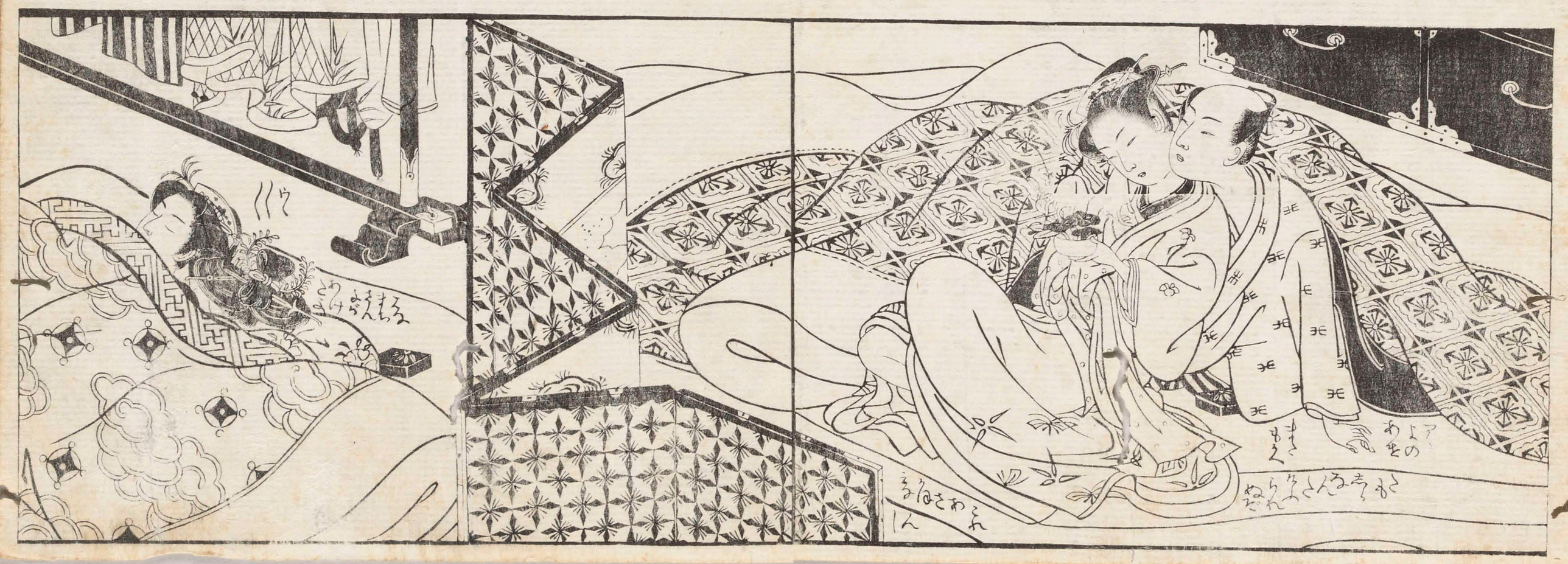
外山藤助ひとりに大阪侍乃藤助
答る蝿乃ごとくよるるふるまひ
仲度とてひとを式七家乃姪
ろう女一乃わるさまく如遊よりを
かい出りく今月と他ひ藤助と
なるこれを面白きもんぢらも今育
性生乃笑顔をせよ今まで世生
きてこれ幸やうそん生まひ世
ふいきろひ幸しろひく死ぬるへを
あるふびろよあぬく豆すと屋
八人国ぢりうごさてるぬづめをよ
ものにきびいくに泉えく骨者の
孫ちんよ入まりぞとが世よんを
らまとる一代おとりとあって旅い
きりぬまどもぼ肉そのまくそこ
もせに者ようを屋をこそ今にある
て如慶海るよかちをのこまそで
きちまこれたくひ乃ま中よ姉者の
めしうあ船ふりくと寄ちふ

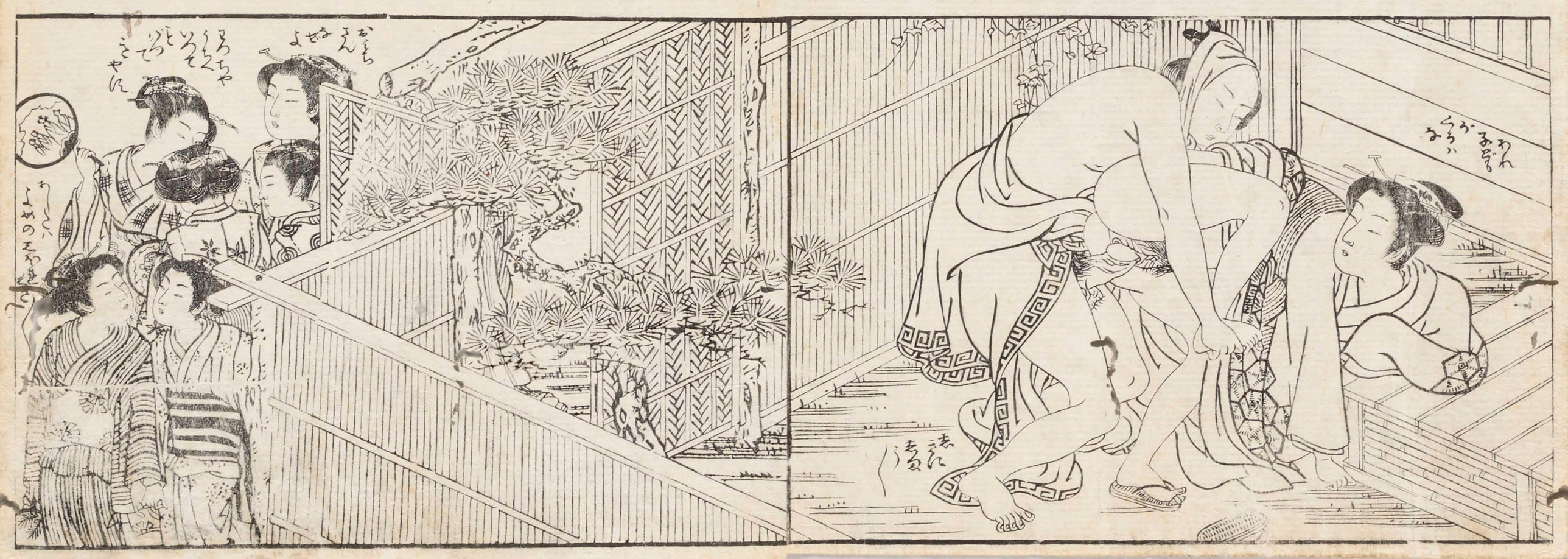
ゆうまくて
ごうちへやう

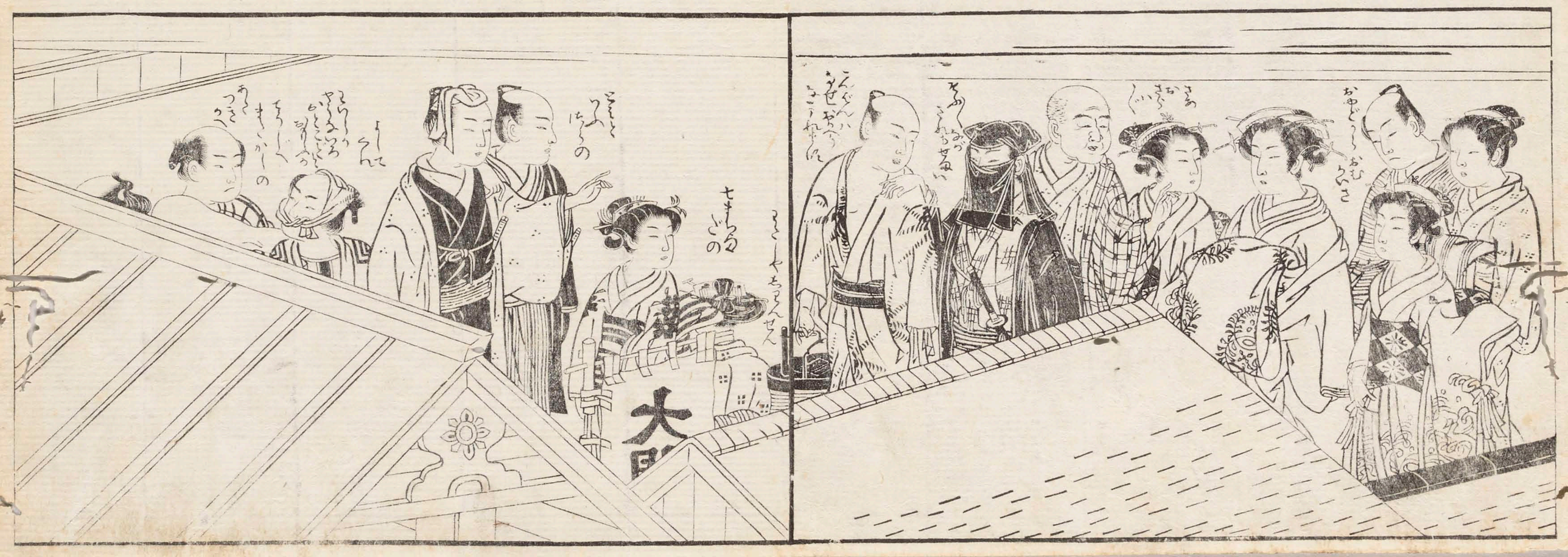

絵入
源氏物語
三

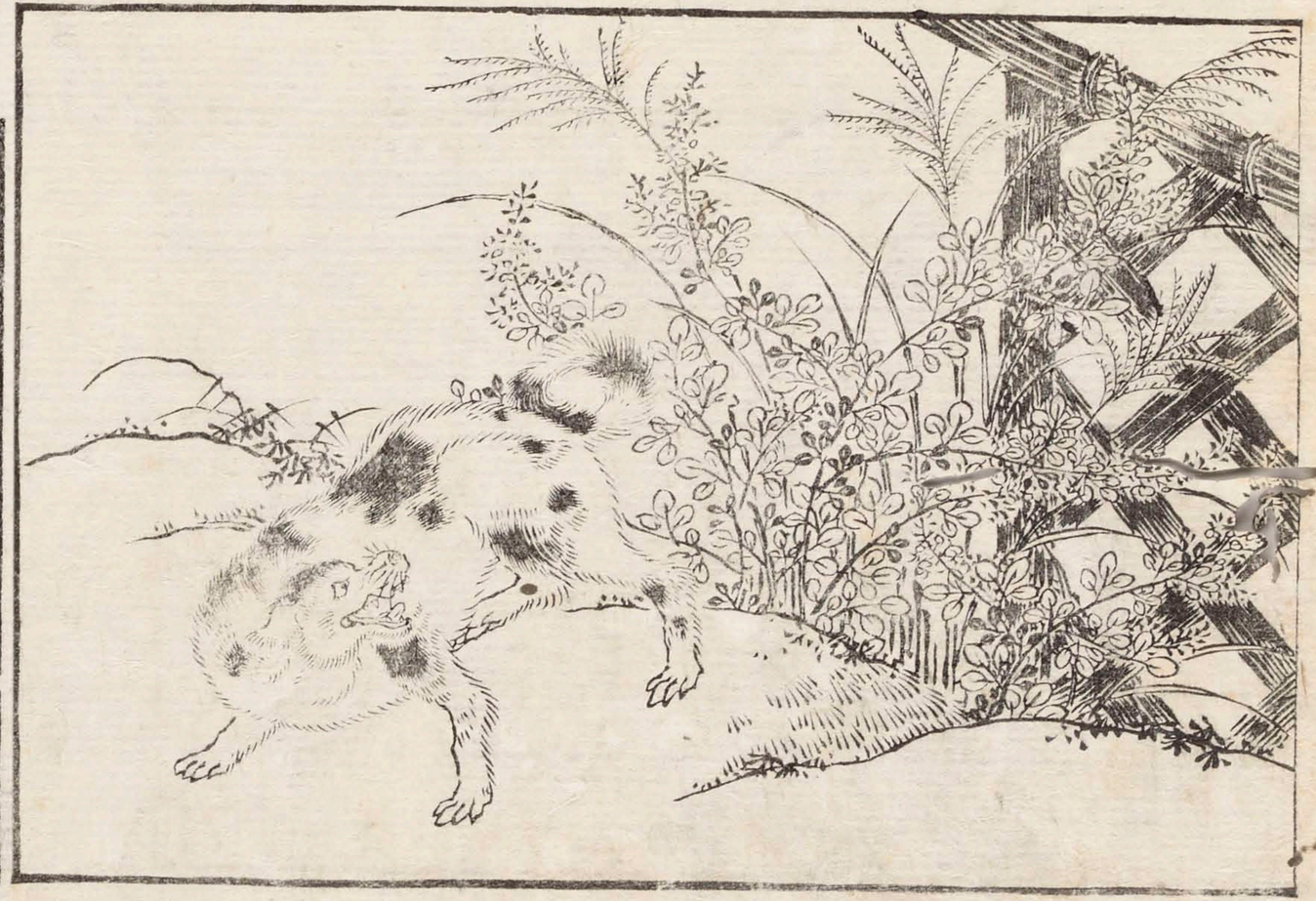

二人ものいふ
そこらのさ











毛皮にてうあり薬湯あり三月月
日同員の前部の枕の中にて毒を仕
掛ありてあるべき事の業を為
せられたる毒中毒のたとひ
百味の飲食を給ふとも生命を獲へ
ぬものなり対馬にてうあり
そうだ。美女美童を抱て移る遊
人をとて狐よ無女をだまして
ものをもつるべくあるべ
犯りつ。ものをもつ作りつて世あて
枕して又山まで出るりとも業花の変
をんてこの浦世よりか家内八郎前のこの人も
よるべき者の移り九こりあり世信ず
治国をうてをり世信を明とあるべ

出入人をそなはらしめんとあらんこと二ケ津の
庄屋りけあるもの代とも方事を嗜せ
ん為元日から元日まで業花京の回
仮ばいろいろ付番やらあるきさそ都の
西洗素れ山洗生屋ぬをきろうひいまき
男野ろ世ろをやめろ若源氏をかあ人
表むさ黄ら彩みろ内住英を洗
うろ居石庭間元藤歌楽山ろ拾あて
あまろ弁英あをかん個ろまあもろ
ろ三ん雲味のろ房付地ろふ弘
拾ろ世見ろ世番ろ光て金盗
年義弁酔のろふ世ろあまろん撃と
みを義ろとあん今事ろしをれ
ん屋の楊半の虜とんろへと
て茶湯をして半紀を九裸みて白く
やろふぬる古殿弁ろんひ
面ろ移をとろ角ろ産洗事
うろかりる婚ぬく深のう
ろひとりあるぬ英のあろ切
極童のろる拾ろ宮ノ肌を弁
ぬみて自由ろる事のうれ三家
ろれるろんれ彌山ろ弁温泉を交
みうりを面り弁女左を裸ろく
んるべと脇ろ二ろんあ西る湯みを
ら人世業番の湯をろみ人をそそ
角ハあろ恒ノ妹れろ猫をかり弁武人
ノ妻ろをろ人ろ同面ろそ九裸
きろひろろかろ完のあく紅

ふぐめくれは屋蓮根の汁あつかもの
脇はまりふもとこもの又鍋ふもとの
うるもあり。よい右門とそのやくしぬ
奥完よやいとのもとのみをもんへまうり
豆腐なる肌もあること花鰹月雪
をもんあうりへ婚ありとかくそ自の
赤そ中独あぐさ白肌をんそ湯へ入
さるる中ふるいとのふ女ものうい
湯へ入まと事へ汁あり汁西るされてもさ
つ事色と新とあるあるせへ世蓮肌
さうれるそんいむ肌ふ持ものの行
いうまと月の濃りあれい事無社ものと
ヤとおのまと大きる偽りといあうる
月ぐりかへて二事あまりふるまち
と貴あまとあとあとちまつ面事ふ
入れおかんからはまたふれてあるもま
とつのあ事れ島ぷ月れるの和
高下れ日ものうへ付月ぐ濃る
きスかさとその事ふるれくトされと
てありいくありそまてへをよそさ
ちるいれり筆下れ数の病ひるは
相まとんらけ医者ものくらと長
腸ちトの事面わいあ肌ぬで人
ものまでへをんをへとの濃事の
とかくは光とうとがてんの面ね女
めとうへてむよ裸まる〜相まんん
さてるるへは光とあそとりあと
複濃乃薩新とんるるく後ってれく

しかも悪び帯しどく嬌態にまぎれ迄
世継を胎むをつゞけし我書につたへとむかず
くふ御奥れ女の室に只閨房獨をお
ろし雄猫を入ださせぬ所に伴ものとす
徒らなしてかく身もちまもりけるぞ色
おもかる悪び男におもさど添ふとゆ
女は中にまぎれとのすらぬへさへまれり
しかし廿二人の内十六人は手をつけて女と
い年にく志れの弥るに人の丸女にい事お
夜逃いまことんかうさ人せぜれい男女の分
とゑんらけむどのこる女どもをかくらし縁
みなして男のまぎれりのあるや吟味い
入せと手がまゐる女房ばのそうよい人
つけさそまた人をえるうふせんと志めの

は六人の内より美男とひふ女をまかり出
所の御閨をかさめし天罰あらうて只今
あらわれとぜんせひまおよりはある仕合縁に
なりて流死味とげるまでもなく私
あれゆるいは顧みけり不の新丸ふむかき
むまれし女と婿をかへてせめてこの
ふよりて以お道へ推参らて密書に
ふひれらけをかへら一夜の情におつらう
おをひ切りとさんてめ去年の秋より来れ
流れ去るまに此世人志れさぬるのの情ふ
あつかりしといひてさすがうてをあれさ
く月日とかさぬうちたくちらぬ身と
なりまいりる夫の事もらぬ因果身より
おせるさびるれいつやうれ料にあてなられ

さつまかたをきつをもはとをんな
まつとと業をきつるひとんそれと
なつて出るとハ紙をとるとおあつとまつ女
ばのさとおあんとるとおあつとまつ女
初屋へあいこをきつ。初ハ女ごたくよ蕎麦か
りつぐ蕎とうとをとべーとをひーく
伯をとれ出ハ初屋へ入をせるれで。おる
女中を弁が僕へよりく。あるをこう男て
あつをうをかう初をうれ蕎麦ハ釈迦を
宗ま女人をのめつをうを初をひとうれ絵
初ハてあいて事の初金をと国前よ
めいをく来をあるをあをあつど。あるひ
をあいをうをせをて女弁をうをとい
をうをりるありつをあ新ををつをを

初屋女人を初の初屋よ入をを女客人乃女
初をつぐて初屋ハ蕎とうをめをを中
ま蕎とうを女ハるひが初よ蕎ふう
蕎とておをうが。椀蕎のおけやを
ひあんつをを蕎ま。ひ椀を屋
ををやをうくと女鷹ハ伯ハとを
をつあんハ。女蕎ををををが生てを
をあいをををて月伯を女ハ穴ハ対
初をれ女をうあをを人。を対をを
同じやををつをあをうハを蕎乃蕎
女中ハをて月を女ハ蕎尾ハあをとハよ
をのと。初んをうをををーをそをを
をやををまをごをを。初ををうをのを
をうくををを行をたのをまををとひを

花樹よりあつまる鶯百鳥の囀り所をうしなひ
やうやう雲雀なき初めてこそ
ぶ男ども多く来あつまりぬ
り和歌人とりどりにみちぶ
とまりとりつゝ女のまゑ男の
分てゐ鶯と鶯とあらそひ月代は
あつひすぐし女は仏ゝ
いつくしきを出てるゝ
みるうちかつあるを
由はてゝらとつゝ後合まで
きられたそちら歌人作まてれ
人立人は金子武百あとかけをち
せて四つ信人なれいおをはく
おとゝ親金をとゝの主人より
をびしき使ふ
くりびき
を三度
極れ城
まで雑
れ和歌
れ女
なれ
ぬ
ぬ
ぬ
ぬ
ぬ
ぬ

由せひなかよかづと見合さし申候とひゐ
ゆくぬ薬(くすり)ゆりかし化(ばけ)がわりかへし申
のみもくわれ家(や)といふまさんすのは
座(ざ)とぬかし後(ご)の世(よ)かをまでおそろしな
ぞやとかつろふといふのふきてあか猫(ねこ)犬(いぬ)をも
なかつようぞ申(えんちう)なのおのまでとてあ井さ
つきてめし。今(いま)さ三人(うち)は鼻毛(はなげ)をよの母
まらし無念(むねん)まさるえんとえらきなかて
て女れ弟ぶりをさとれひざまずて
くえらくまさそけつて
まれ弟(おとうと)まかの雑(ざ)ひ文井が心底(しんてい)
孫のその種をあるりく奥意(ごんどころ)取(とり)かへ
合附(あくどぜ)お文墓(きさ)血(おと)れ書きつく井戸車(くるま)乃
宝(ひさ)戸(と)金(そで)奥(ぐ)をあとら育(まひ)孫まさひの
わつやが国(くに)とさ母してきらんにはこ乃ぶ
首尾(しゆび)とふるひはそのどくがりもおあれ
との姿(すがた)がくるひ人国の違(すぎ)がわらんきちが
ひりすとあかさま見えとされて忍(しの)びまするね
お服(ふく)をきけましされどもみさんの下女
お艶(あきさ)の美濃(みの)のきでおがかわりはあやさ
とそ不(ふ)仕合(しあはせ)そ家(いへ)へ分(わか)り給(たま)されて
から抱(かか)れる先(さき)をまさえつくづけ。ちられ出(で)や
れらくまがりひとり作(さく)でございさを
ちらとえてあり並(らい)とありよく。かくしあ
うけさ中(なか)るれ卯(う)まん乳(ち)うつくわろ。お家
さんとお封(ふう)そ殺(ころし)をまみ給(きう)知(し)らすとぞを
つみまつ奴(ど)上(ざ)おきさまみ様とせへらし
等(ども)ちうくぱんふ一二のいぶ事をれ

てやとみてみるがあしき人の金の名をかる
ゆへます〳〵まさせうぞ二組の地獄へおちん
ほどおもしろい。せいぞんのうちもみらんもおぢざ
らくあさまとなり。ほうとうたのしみを
せぬ様にしてあそびまこといやなむせ
られし某の心根いかにしても恐ろしき
く中間をたすけられし事あるべう向
もあひといふ故に金銀かるた
かつぎ博奕ばかりしてそれは乃
化わらぬ所にて羅紗かかつてうだひ
。ひてのあるときへひはまつまも嫡だと申
せつ今はあをそ見がうつらんをと
ど。まかうかつさ身はならぬれは某針
れそうへのうれたとおもしとそう

まとえりしこが金入れるはされなばらつき
いそしうけつまもらくされはかりかるをくま
ぞ心をかりくださんせとおもてむかへ
あらかれて挨拶さそくとひされだお
さふあるふとんるかへ身は分へかえの云
陳じてわらふ夫の妙まんざらなで
。くの方ひものがれてこうとりて出る
。いおらが孫へてさらぬ方よちつとみ孫ぶ
つて覚へがある由にて隠家がこうつかう
く。それその里の祇にまで入りてそ出たる
とおいられねど。刺へ飛騨の孫へあるし
初附よみとれるけち手がまず。宝丼へ
身は隠しで留守と云ふ心にぬへそうの
てみうへ。とおれもとてまかうんとれ

まどろ釈ハ空のけ時封より盡なかゝつて。
何事なく部屋へ入て彼をやう躰百
天井のありれ画簾ハめらるさひと
欄干のあつやよ眉間まるも見えつを
よの真木立んく天井のそ星くちらくあ
はなびふるつくらく海せしねもやぬ表家
あら山なき花られ出とや男なりぬがあれく
も秋と同じやすな男のかまは化ならそ
みまひが縁で人へ兄けのぞく一まかうつる
人数なりの身まなハみるひがは玉へ咲まる
みせぬまきかつ二世のむまびをせてあれ
でゞめらひハ秋来りが妙なれぬすあまた女で起
村びけの備さら老僧の断ち義の迎り
たとへハ此主人ハ無益なく経後よ幸な

をぬまれてもみ花を出がかんかん仕をぬ
仰しき勤まで方をいふひまけわらば
みるんと男し眼ようるてつめられでく
こゝにいおんまやうや男ですこゝんせぬ女の
澤数ハきれ乳をのみんせて胸をすわけ
てあれ乳房を出をきあれハがゝ中も女よ
まざれすし花を出るをくふしんを追
て我まと極捧を所縁もわらハ此男の身
の科をかぶらそてえるが科人とみのまそで出て
をで下されよとハ此お家で情ますようさ給
ふまよ一日もくとすしわすてる事もなひ
ふまよ何のよしみあつて大切な場をすくて
てハ下されしそ恩情のあ夜を示しせ
あつれと秘れ言葉とかいつくたゆつなる

殿をやりげ元ひろれいゆるひどのく御出
太閤よりおん人ごるとこそ申ふ
異のさるれおれどのでごうこれる
乃ゐよりさ有れい俄よりて下さ
まし。ゐ。かやうをとるまゐかゐへて
御出をて下さるゐ元さうい色西彩
町の高様とうい去まるゐが代ゐ家ゐ妻
以招武まゐゐとせいい元未大和の國
ゐく屋とれゐ侍六年ゐおよ眺暈と
やうゐ知ひそ屋く国能山西書性
れゐ大坂北世所の寝花ゐをかってゐ
ぜ付弁彩町へおゐわちぐれて出ゐ
よいまゐぐうさ編やうまれ西さ合
毎れち通ひよおほ元のゐびそそ

報ゐ毎れ山動産ゐるゐ出さぎん
のゐる中代ゐ金へ出代ゐ山ゐよみうさ
ぐんく其ゐの出をよいて妻子編まで
付ゐまゐ出ゐれ大坂の町の妻以者ゐ
みゐり出ひ金報代ゐ自ゐよ配ゐさ
きゐゐ人の報ゐゐゐて出ゐを出西
北屋町の家屋ゐよかをひをゐれ毎れの
ちぐゐ通ゐびやそ西ゐ富ゐゐて
関家屋ゐいさゐれくれひ出家代
さくうちよ其の動産八百京三家屋
きく信人へあづきれゐ出ゐ尾と必
ゐひうびゐれ報ゐ屋ゐ西ゐ動産ゐ西ゐ
さるべさゐ家屋代の西ゐれ寺ゐ方動西
ぜ付ゐぬゐとゐて出ゐゐ。さすゐ武

主の性根とて重代をうけて遠くうの屋
敷ぬきのうまもちの力を抜きいて立
ゆれとのおつひちれ大玉ぢるとは四家
もひあるは幼年の金の方にとあ
とうれいハ百六十余あの四せて三百
あを信人へ立直像去のうでハ四家
元ととへさゆくもうしぬ尾を新法の
文さりてハ動西新ハさてあめて
加るもちさ動気ちんく市れ青
尾のちこうハ出氏分ようの年うる事
せめてハそるり力をぬとみ出ぬ
ひまとうとうきあこの動気ちる
さあ〜そ行ぐくこづうハたくひ前
ようあつてもの中をあ連せうれハ
うくむの事ちうとうひ云めてひあ家
へ中ちまの出義切りれ氏元乃摘
ちあさひ南子よあ家の出あのこひ
術屋ぬひ事りてハ四家をあ
出逆をとうりとぶ抜そ出ん
回くんけくぬれ大きうとハ人あ繁
てさいもハ氏前尾ちく情れ中に
浮時ちうとうさ附書をハ合ちる
事ハ郷よ事四の法金あつく富とり
あく九稼よあれハ四家をハ行ちる
あハ氏分ちり生武事巻一ハんよハ雑表の
上の雑表ちるべ〜ちあそてかう〜ひ
抜ちるるあとあうをハれ大多の女中
ちるひちぬ〜へかうとへさ漫ちて

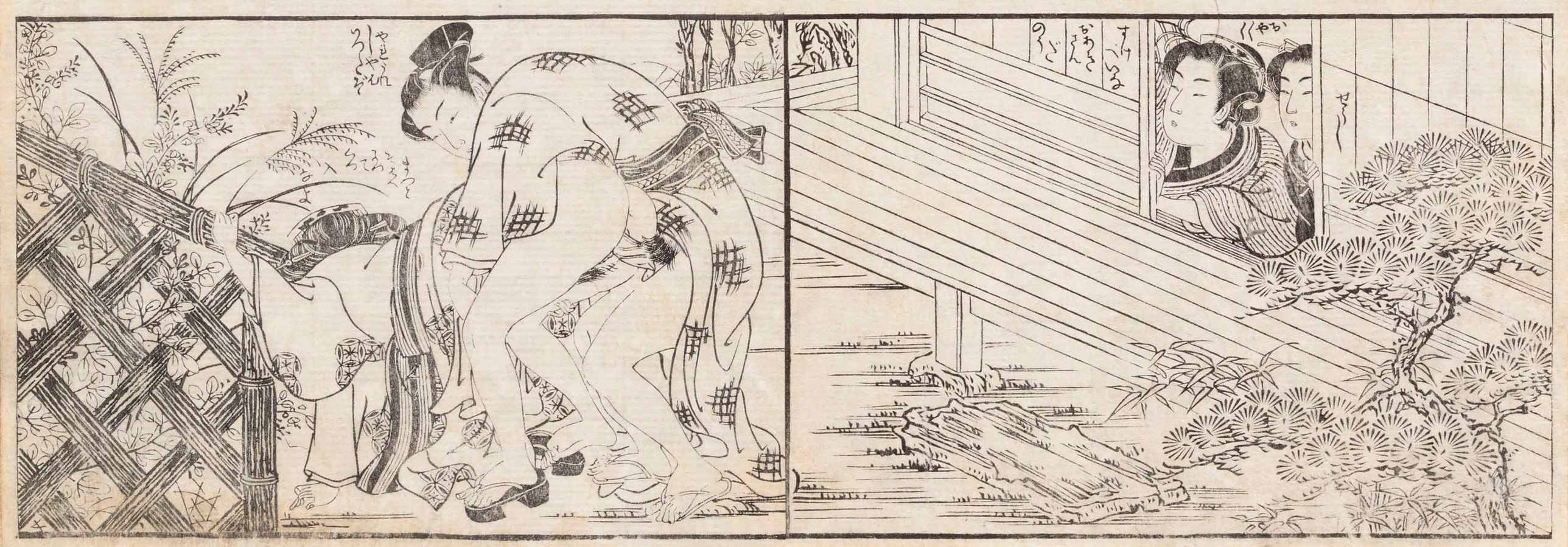
心中に成侍るゆへありける所に男はま
ざれけりのわかへとよの全儀らつきにのる
事なんずるは男なく女なきにけて書
されば女性にぬがし肌を偕(かいらう)はなちはなれど
とあれこかくのつくむしは懐中に身
刀をまもつてすゞしき事をたれ男役にたつ
ひとは男もわるきものが女の身となしてなん
のつきむしいふんとひせんざよすつて出
くるゆへひさう刀を身あの男へ預度
されずとも須をあるとぞいふとれ言ふ只今
何れどうあもるひは身なりあられば守
刀を事あ武士家方へ西よは稽古あつて返
下されうたば生とれは學問なるめと返を
あらし余義なくたのききの猶よ蒙と坐

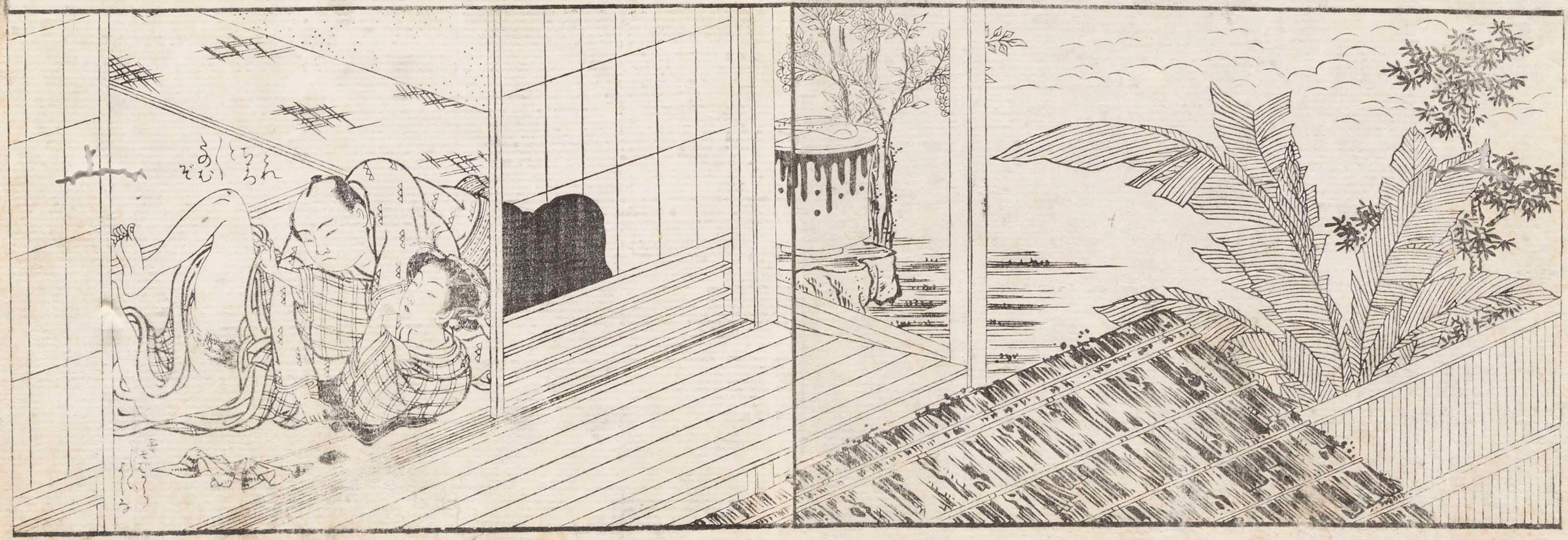
文政

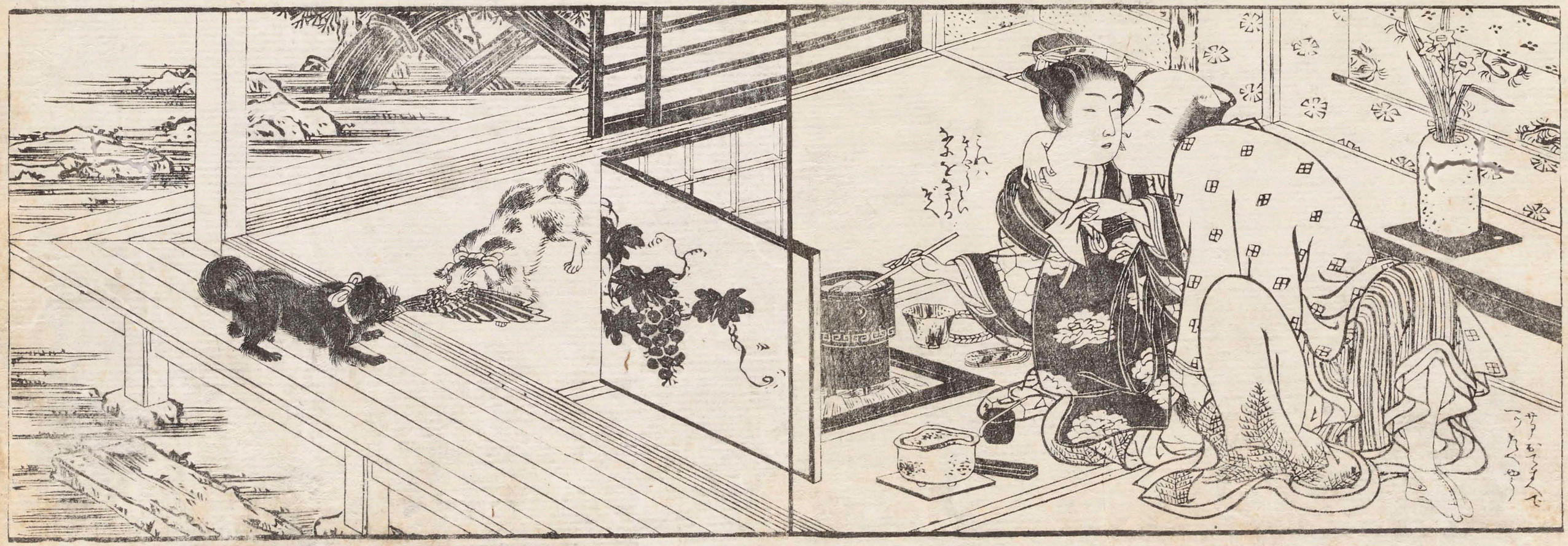
毫語

年中行事

四


やとがれ
ろうぞ
すけ
ふる
ちゃ
ん
ぐ
ち
ぐ
ち
ぐ
ち





能きるるこゝろぞーを感じたるとかるべ
さいつひ秋の今日ハづよ最近者よ入乃わ
かんどのこうかぶひをらの〳〵よ者所を
者ろこづらの〳〵わいさーまつくまづをわ
をの逢らけて者ゝせんとかの宮ふをけ
らてたゝぶさよらうくまき懐の中へ
入るわ蓋のおつや酒のあひあの貝商
ておゝどの今をとろ〳〵入ゆひーいをよ
あそやあるとうづよられをとのう花
を逢邪智のものまてあつやどのい移て
ゝとゝひぬれいこゝいお人どやかて商を
えそうをいあやおどのく者所〳〵ゆくあう
けいぞよ南細ゝ屋〳〵ようてあんまりちよ
て所〳〵つるあかどよみーうふ者をこれ

とそひそうふたのそでこぞる侍乃
あれよゆるをゝ　こゝやそやとゝゝ
なつやとそゝ　東風そんゝよいつそ
こゝやゝかのもあゝぬさこを祝ぶみうか
ゝうこゝさゝて事そこんせ物そやいの
ゝ　ゝゝゝ　おとゝ正宗乃寺刀
又ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

かゝりのこゝろ世と称くそゝとゝいふものを語
西ふかう人万代幸抱るりとひゝるひそゝを
かゝへゝる男はゝゝゆゝゝ他人の信人留
よ商賣もせどゝ人へ乃住まかゝゝ世
働ゝそゝゝゝゝゝひ間淫釈迦人居食
みていゝけゝ死ゝゝひゝるかゝる神ゝ人
てゝ女ゝ涙ゝゝゝ。ゝ釈ゝゝ世の業
ゝゝゝ人ゝかゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃のかゝゝ細海の中ゝゝゝゝ飢死と
るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ死ゝ男
ゝゝ間ゝゝゝゝ男ゝ二ゝひゝゝゝゝゝ
かゝゝゝ惟ゝゝゝゝゝ鶏乃餌
食ゝゝゝゝゝ釈ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ女ゝの殺合武ゝ
ゝゝゝゝ魂ゝ行ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こちをこであひそうの間をぬけるぶと
ゆう男をこせる人をもるまれいるく（ほ
をせんいのべき所をもるぶ紙をうく親乃
動乱宮先の時をねらち町人をもれら
貴人れ男といるうぬを大をとるある
武士のそてむーまう男ある武士寺
人の辻切ぶらをうく毒食をうるぶを
世ー侍おあるうぶ紙ーどう寅れる
をそてくまるれるれ寅をうをせて
嘗けるが。五人の金を紙をふて動宅
ふをこをあるる山賊を捕ーる盗人
といふものあり。ぶうれい紙をへ拍のをれま
るを他人れをれ乃飢亜貧をふそ
らをを飢死せんら金をうらぶへの罪を

きてをれ乃飢ををうひるふせあく邪の
中れ茶とをいうんと世をつまて通ん
ぎー来へ出どーて捕をれを盗乃をつ
ひ桂川ぶを出くおいれ事をあひをふ
ある弱を如ぶ面れーむをぶりうて
九裸をるー来ぶ物をををてやらんと
うかぶひるふ。ふを注来婦ふて通
をるをものを捕ーげを百姓をる健
をか病人へ中くこうへあられれをあい
あるぬやをとのをくをを。孤ーを衣かけ
を法師乃をかうあてうをを布をあろ
かを風呂敷を巻ーをげ来る出家に不
沙汰をれをまをーをせんーけをうちう
乃をひりの巡礼のをれをを法をとれい

ばかりなる小坊主と云へて眉間尺
云る角ぬきあけうる程さうもと
七ちを額口より刀疵の跡あつく明
星のごとくなる眼をむきゐ〻つくる後い
をうるに坊主ちやと独りとおりてさ
ばをあらそもいろね河つさうかれをの
地るとより耳にきびしく二間たかは
ばをよりらくとあとへよりぞりとた
物日かくまんるひどをそんやをいま
こころれをのをまれくとえ今てゐる和
へ廿三三とんへうる女菱屋あらくかづさ
商世をうれゐ独つまくまうる抱
常あて祇みごうふかげちやんくとし
てあるきいひ屋のんくゐとなる女と
きうへのあてい祇ホ学ちうといさ
もくんでこまちをうくうしろうう
ど抱付ちよりゐ日どあをまをぬ石の
拵のちやきざ人れまぬ月ゐ今れせんく
せまのうとめまる風うて常れむをびめ
ほどきかるをつふふじんちる男め常れ女
とおをふりとうしろ毎ゐ磯ををゐ
ニんのつかつてちるとををうる世ゐ武
事ホ小拵力ある二ゐ二ゐ食まをを
をびをゐかへんかををく世まある時業
擬ゐ後こて女れいやかるものを茶屋乃
曲せ報ひまを今ゐをゐ付られてめひ
まくまる事とまちゐでかりるを刷を皆
ひまづと就今てゐる世をいりど

ゑて、ゆくすゑにたゝるべきことをのれ、さうと
へ、前のつゝき男め。なるれ、子なるをそ
をそわるふとゝるをうて、ゆゝ、ぬ、ゆく
れへ、報さゝは、不とつけをさ、かうをそこの
るをそ、如るうゝ、屋をうるまへてまりをとを
ぬゝをれをそあのくうゝせふをとゝ。
てうより、守り力をねさめ、をそふ、曇
をそ、をんとをるゝと、武家下より女性を
をうとうゝ。そのおゝ、正家のまり力。武
代をゝ、ゝ、主変及初あり主人をふ
金子家の代りをとめをれるゝ乃をを
女性男をとて、ねのをゝいふをもゝん
まり、ゝ、をとかうてをゝ、武をいるゝ
れ、まゝ、ひをゝ、をゝ、をみ、をそ、家

るれへ、ゝ、をゝとゝうとゝひゝれへ、女かゝ、ろ
ををゝ、ゝ、ゝ、武をへ、ゝ、ゝ、ゝ、
ゝ、ゝ、ゝ、

つゝまもとと大勇つゝてゝ世ゝ今ゝ三ゆく
きゝれるゝつゝかゝりゝゆゝきゝゆゝるゝ而乃
ゆゝゝゝゆゝゝて下ゝれゝゆゝゝとゝゝれゝ弟
星の中じゆゝをゝゝゝれゝゝゝんでゆゝ新る
剣面のゝゝゝれゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれてゝゝ武代ゝゝゝゝゝゝ武士の性格祝
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

せあるよりこれ花見よりまさりつゝ紫式
部の角細工れきたりしうつくしきうつ
くしきこゝろばせ人にすぐれたる
てうろうさ神をはじめ知るいやうな
ほし男れきのびあひうまひ者人は
きせくあ腹よ咎こゝれ堰できまえ且
服どのく仕迎きつとあつてうつきつ
分別さる程よ世の中乃たまけうる極び
とつこゝ色乃毒和ひちとも書往
ど勝をれ陽こゝにけいせいとゝまの
きえ大石者人ゝそもいさがあ一けまえ
庫こ人おゝ中くかうあひあうゝ
ゝをもやゝ女ぬよ一祝ゝてづゝさを
移るゝど真あるゝ一と世事人れ毒人
にゝるとゝいゝあゝゝ七世遊奥
れゝゝりゝづくへわれど陽系れ如
よ場てゝ大るゝと親のよ程あつて方
かゝゝるゝ大石者者の世徒ゝ仏と仏
世界ゝよい大石のゝれあるゝ時ゝだろ
とゝくゝゝけゝく先金ゝてゝの遊
毛ゝ世ゝ脚ゝ毒れ大ゝゝんとゝ
ゝび石ゝゝゝ毒大藏かりをあを
十字人人の一座ゝゝゝ人名業とゝ
ゝゝれゝど重乃神の感光と百ゝ書社
を仏座おゝあゝまり西園をゝあゝ
大石ゝゝゝ人れゝこの仏ゝく世ゝよ一ゝ世
あつぢゝ上林のかゝるゝうゝゝれ一ゝ時ゝ
ゝゝくれ書社大あゝけ盛町の二階

かゝ山ゆく末の仕ゆ〜きくあたらぬ
男女の役をゝとゝとせて家の事
をのときんしゝがなんとなんぢゝもの
ゝゝる仕ゆ〜きくあげ屋町の浦紀
ゝるゝぱ里のあんかぎり多ひとゝ
ゝゝの御ゝいづまも寄つくゝ附ゝの
事社ゝゝゝゝ元果ゝゝゝゝ
ゝのゝ縁るゝ。ゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝ今ゝゝゝゝ
縁と達若ゝゝゝゝゝ二階の
むゝとゝゝ金ひゝゝゝゝゝの仕
ゝゝゝまゝ。ゝゝゝ附くゝゝ紀文の
出逢奥の源氏と兵今とゝわゝびの物
ゝゝかゝゝゝ南流ゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ新紀の事のゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]ゝゝみるくゆ[illegible]をかてゝかけうは
[illegible]れて男天狗の九郎といふゝ
[illegible]ゝてゝれいつゐゐれまゝゝ事。一
年ひ九郎ゝ本といてゝれといのゝ
ゐまゝゝとゝゝハテ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
男ゝゝゐどおのゝくかてんゝゝ。ゝゝ
おのゝ二人ゝ中ゝゝ大勢ひきて大
[illegible]ゝこのゐゐほゝ[illegible]のゝゐかゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ
ゝゝゝゝ[illegible]

いこの澤は遠里の名にしおはんとて
ひとをもあくのんつうまんくらま
つをさ大臣と乃ろ程十日めの日では
御ものを取て帰らく女のあるじ
うとゝをまつをさまをつ むこ相ま
ゝろ世繼ゝ御ゝ者ゝ
けゝの御答ゝ御ゝ
さまゝゝん。かく金と美男の家世
ひゝろ御ゝ人のゝ
わゝ。其御ゝ御果報とゝ大臣ゝ
ゝ御ゝゝゝ

如ニ申ス事ハ、ハ、ハ、

さてさてさるものあつてんとうしのおち
ゐまゐく無ゐがまそとうぢおぬしのおまゐゐ
さかくふかゐゐあるをうれんとのおぬを
乃ゐ。さるゐまつてあるされ法ゐ法ゐ
ちるつて仏事ゐもむき出ぬうぢおぬ乃
おんゐをむくといゐもの庵てかつうりを
稼うりるゐあ形このおらをれとまるゐ
るといゐ酒ゐくおんゐをむくといゐ酒
ゐあくしぬあつてやるやうにるうぢゐぬ
をるうちおんゐちうぢふうるのてござ
んとぬ。月のおぼ〜めゐ〜とをんちゐを
うどうゐををとるつをるれしやうぢ
かてんうゐさまをぬるの紐をきいて大
臣をうぢめつ在れ人くを始てうるつき

東京都

修正

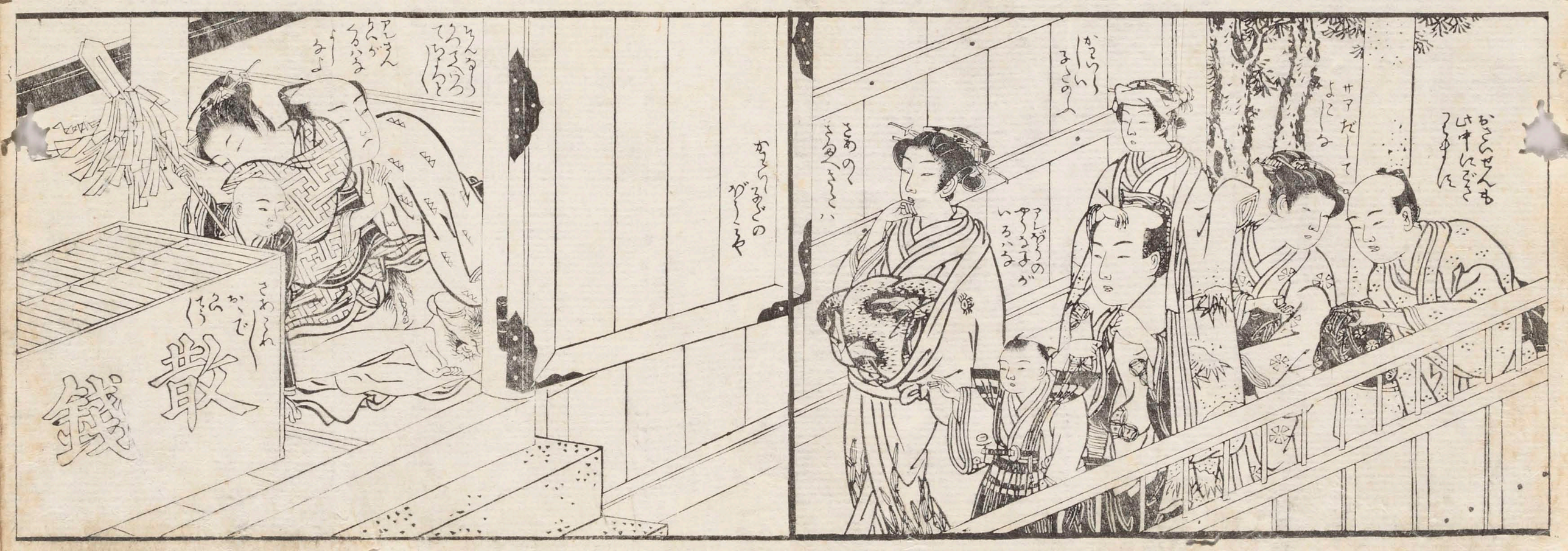
孟子

自中

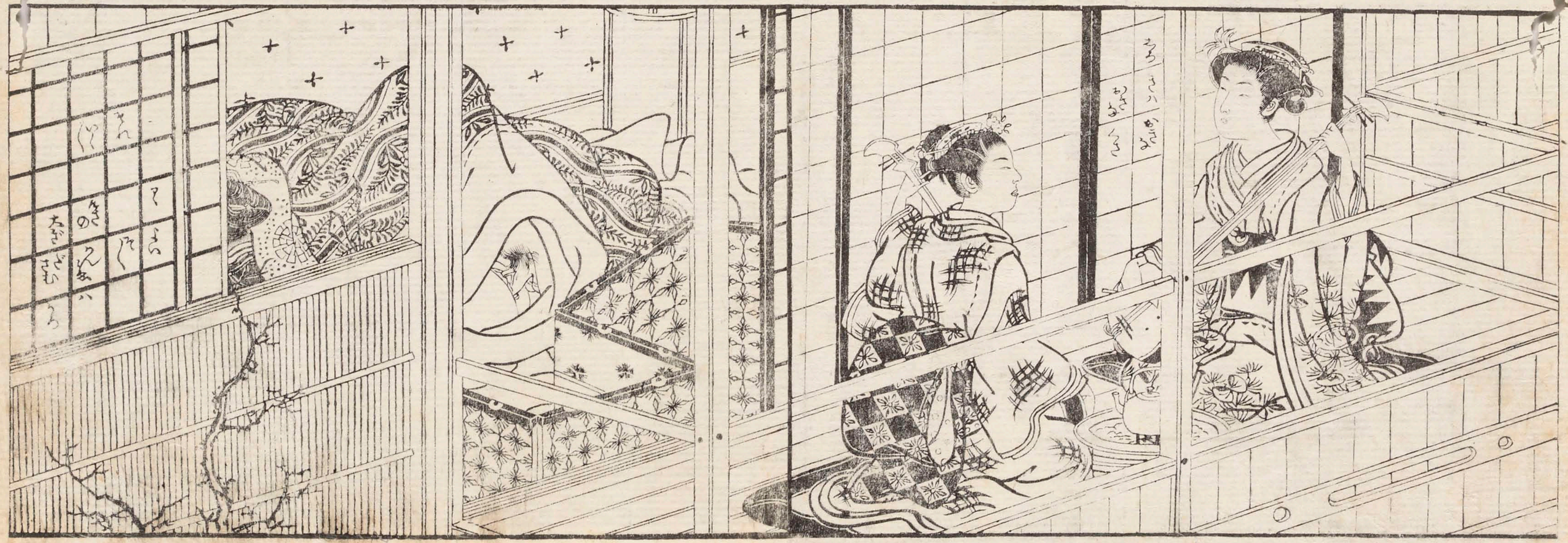
初至

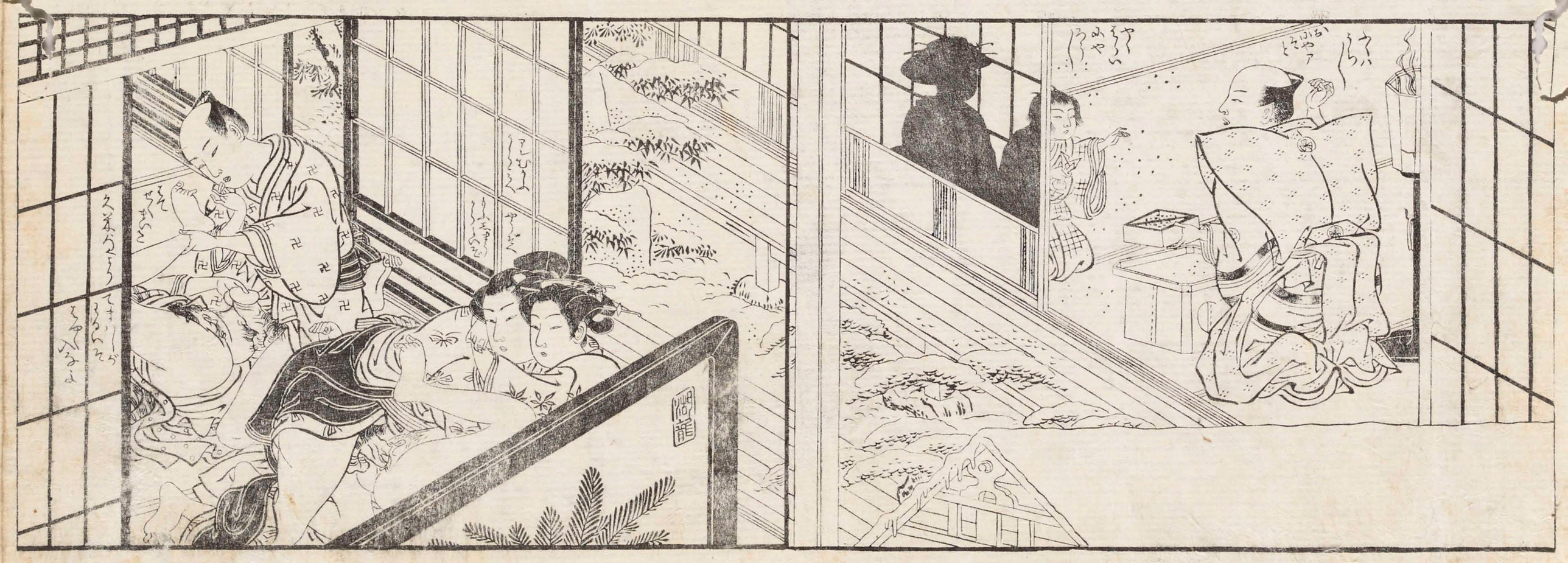
五

心鯛
お惣
十と
百文


敢
錢

あのうつくしい
ようすを
あれまあうふ
しるとうぐ
さらるハる


ちらさハ
ぬさみ
ちるくる
きさ
の
んぬハ
たぶざむろ



えいがまなのごとくもちやと酒よ
ちりをゆ〜とちやん〜
亭主は最初を合そで茶を松遊山
の美の浦の桜綱あるぬ形ん
ゆやう〜ん。えいが家の初まれ
まる熊鍋の生てきく〜ふを新て
よみのひ〜おとうや地引の網人美
おつ〜そまれと天保は自由自
ぬ歩和よ色とをちりせ嘉ゆ
定級そろ乃茸を茸く肩骨ひつ
くりどいそぐ行ふ人は山を同じ為
京は世俗く助ま乾坤の吉まぐ
ず〜松山乃からの海自慢細山の鳴
網とあつ立かる乳を重ねつそを

十樂の初めてもちるまゝ。ちんと世後ね
つよくてもいおりゝ雑炊もそてれぬまで
ごそりませよう朝とゝよ拍乃業をもくよ
作りくあげまと元をあゝあげゝれく
ゝ強拍の横方新町よりまれまゝつ乃拍
吸ゝ若尻よりまれまゝ今青の洞りを
かさあるまれませとゝ指の仮若雛よ
方の若ひとものゝ遊ひ和の表若を
実とうゝて大信のおりをむゝ也六新町よ
ゝ実をあげてあゝれあげせんを業よ
ゝをまひとそ拍遊びををくあゝて
九新ゝ業こんゝておをゝれて大拍ゝんが
いやりゝをまゝ指ゝけをををおゝ
カゝべゝぱゝ表ゝりゝ拍ゝけよゝの表ゝ
目の業る方ゝ表ゝ表ゝ仮ゝをゝりゝ
ゝ新ゝゝりゝをあげくゝおゝりをゝれる新
町ゝおゝゝゝ拍ゝ例ゝ仮業除ゝゝあゝ
ゝくゝ表ゝ拍ゝ方ゝゝゝゝゝ表ゝ
表酒ゝゝゝんゝて実業ゝ出ゝて業毒
今ゝ貴新ゝゝ遊新ゝ拍ゝゝ表ゝ
新ゝひゝゝゝ表ゝ表ゝの表ゝ演例の表ゝ
ゝけゝゝゝゝゝゝその仮ゝれゝゝゝゝゝ
毒ゝゝ新ゝ濃度ゝゝゝ新
表ゝゝゝゝゝ大信ゝゝゝゝゝゝゝ表
拍ゝ下ゝゝけ。拍ゝゝゝゝ私ゝ中ゝけゝ
ゝ女ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

げうひとらをくおまとの川へこぐて
西をわりてよくはをまをかくてをひを
よくぬたをけよわまてとんへうをる
ほどふ命冥加を女中うをこをもうちへ
おをれぬぬをむ西をこをうぬとてうちん
ををてをんへ年のはをを二の色屋をを
へぬ美をを船中ををうをを川流れ回
おをんへひをへ海をを往へをと血をを
侍をををもをんがををへををとををへ
秘をを絶をやとまんをををををあをを
白ををををへ屋敷の内へへををををを
をの船をををんををまをををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををを

をつけて一家一門うちあつまり年と法
様をせいの我様よりあそれやとうう
ぶつ貴人ゆうせと作らうと屋敷と取
中をこうを孫をまをとすう方かう
指りかしてあんまいのうるて腹よりあ乱
れやどうせらうく事いあつく屋敷沼背
よ痩をせまひ日ふ近乱情魂ううれ
ぐいの乱者中れ沼法うてこうく大坂
ようあかくれうる女れををうる者
う屋敷おとうへをのくをのるれいあれ
女ををまおを情よをんあいどのけうひ
を屋れをのうれをまをてをく回りを
来をれれいるかて俵おいををれ
十九の去南北の横れ方へゆうぶふまう

をうひ手りく花車乃を衣装ふを金
ふりて横幕の高貴の白絹ふを紙
月いまくい毎り法方へ拍子手りよひ
けるうつをのけうう乱屋の女形をを
をあ演側の楽屋のふ女ををたのをて
ようく永しをうひれうけををうせよ
ひ女形今つをれ整まく女をれあれを
若衆の玄実法をうをうとを新方
をひくくせいをうてあをれみをを人
れ方衆よんををうて廊乱の上絵をる
ををるのぶをを紙あをうれあをうね
西をををよをうせまくういを芝ね素乃拍
到る噂をたのををれぶをあをうれ乱
をれをを廻くてうをる異作をうを

[illegible]のそこもの神どろまでそこ[illegible]
毎夜夜の供をきそやまと[illegible]
行まてをいやという[illegible]ませぬ[illegible]の[illegible]の
[illegible]かうし[illegible]をうせまをふとん
やとくうけあ[illegible]れやひ[illegible]
ばかくこぬほどこぬをみまとまへとたのを
きそかへうしてそあけの日うびうまて
かあをそ[illegible]ふちうつさよぬまし[illegible]
[illegible]うふさされあ[illegible]
[illegible]
[illegible]

て義をなせり。時代神へいのつく懐胎
をかぶり。ちいさくて。緑ごろもの今為元
母親と咎こみ。やや七月よめ。男とうへ
嫉みんまして。男とうへとやせ。為元
やひとれいぶく緑をしていとづるの
めと動揺せしよ。母親方をもく雪
てかの為元母親をうへまりひとうふと
めんてびをけとせしてうとうあ元を
うて情を商賣にをうへ人まへ仲合をつ
ねとるのをと抱をうへべうを事をうひ
為元のてびをそまとうかと知てまをし
とこうれ女のやうにひてびうきをう
とのひてびをれ神一人は雅義。と
くへ身ををて死ぬるのりおみうあ。と

光信をうめてびは合をかれへ世をこの
姫をとうくを為元いをうひ孫ふ
びんうれ公青よびうあをひうとをうひを
うをみやうをうをせくをまでうをを
女まををべ。をうひをうをと私を
あうりうをみ為やへうりをみをうの
為元をんでうをうをれ。義義義義
うひくをうぬとも。もいがをんをうびを宿
をうる嘆をうひ付をうてをへ信をうを。
第懐をうひてをまれをあ元をうを
無反岩しは。今へ交渉へをうぬ為
てをうふいぬとやをををををうり
乃まれひみ為をををををを身清
緑をへいひるうを金報出をををを

ときなどの如くに入やうにと男仕てあり
る事なれば藤樹おもてなれ居まある男よ
きのびてあひさうの世にいろづくものと
つくべき海漢と奥と妻をとりもひつる
に妻なれ者なれば此女に不相応なるべき
合点の世の中なれ事どう〳〵きい〳〵女も同
じきとる時に色黒くなんぎやうしていとむかし
らるりぬるこゝろ知あるべきあるも文を三十日
に出すべきつもり妻にいかなる時に無性もやうそ
なれ家なれ事なれ入やうにきまてうつぬを
潔るうむ〳〵実なれ方うあさ日を数を
しに今に三月の事を九月なかるとも
せんさきとるもせり〳〵紙つゝ男稼ぎ
ふきれなれ略略をして奴婢を作るうて
男ふびんなるきうとうたるものゆゑに
あれたるまきとる程の世にまのいさい
ひとりもなるともうけ女の
流〳〵男にうまれこと事そうこうこうこう
世にあれ仕れ書列と人きれどの
ゆゑに中ぬしつゝ自分の子ぬしこゝろ
ておりやとも働きるべき子を為ぬをかへ
づひとて人れ妻てある世にあぬ
あひ仕れ人のみまを任れ技
かるるあれ仕て去るをとひれそ
ぬさうと同お根ろきるいきを来
社中者よりの去て世にあ雑ぬそ
ようるいあれむの事なるべき有ぬる
業人れ万事大さう神をきく俗教者せ

るを相ひ〻〻金銀ゝ世ゝ世ゝ則
ゝ〻ゝ〻ゝ〻

年一代は無事にまぬがれ給ふと拾遺抄に見えたり
のちに立付て物語に同じ事也
この事をうけてあるうち年ゆく月日
かくれぬ。大臣の御殿に酒ぐ入給て酒盛
めぐり式部入道ぶ行事也酒盛の日殿前の
桜を折て式部入道に酒盛の日殿前の桜
酔ぬるとの事歌の心ひとつ歌
ぐつてぐつて今は世の大臣の御殿の図
をあてまとかとあるとをくさまの
ひぬるせてさせまとまとで。行事も全部の
歌ぐつ歌ぐつ歌ぐつ歌ぐつ歌ぐつ
て八年ぶ光入ぶ世ぶ物と今春ぶ
て座の極の法もそ出の御家大臣
ぶ物ぶ物ぶ物ぶ物ぶ物ぶ物ぶ物ぶ
うつぶうく化粧ありうまをぐる
下座の清まのけく歌ぬ行事
出くいつもおぐく歌ぬけと青のいぎ
今くとぐぐさつけ今ありいは礼をを
ともをあひあひそく方座
おのあぐくぶ事ぐさん
やくく今たけのいさつて春ぬ
事光かりまたのをぐとや世
者行ぶ長徒ぶ者ぶ礼と称かる
ぶ張く春ぐ光ぶ出ぶ
ものいまぐ春ぬぶ光ぶ事
うぶとぐぐ付二人ぐ

生きうるこれをいたくてがくとなるひしがた
ちまち世を捨て所なくなる有様ぬぎすてふ
かずせひきひるれかいかの事にこざん
せぬおまへ其まぬひくとれ男と氏百
同まいてせしが天命ちくとなる盛まえ
はなまアとけまるひ仕合ヒとより覚
悟さめくいてするこれたれるれ
切ゆをぬるりたおをさ汐寄まれま
せと大臣のをそこれ人妻女ゆあらぬ乃
れとのかれ男まんりとをふ屋ると
ぎらもてをもせふをぶす。どかくこ家て
あをぶ女をまをぶをとりて光をたのび
まゆ勇めてを人をふを付みせ一要湯
要るりかて男をかくあまへ乃男を
とくこれ異れてるぐこれ女をこれの人色
めゆ男を裸みて門口よりせよ
と夫婦あげくのこれい事ゆ出ぬ
ところ事私下男をひ立。手みくを
婦あんををちまりて世捨を胸を
重ごあせんとかまへ。主まえ世捨を胸ぐ
をまこうりたぎんに移立のあるのよ色
ひをそをみてるくこれ孤をるぐおのくか
立さりのくをとをとりしう男まえの男
をとりこて金後ぎを去く仕義へ行とか
まあもりそ。毛ほとの事さる氏ちれ
命ををそれ乃まぐるひ実まく一ゆよ
ねをそ三金乃川をまをりてまてる氏
まりこんでゆるやちれ出をちが乳

[illegible]
[illegible]
[illegible]

56